

学内六報

2023.4.24

no.1569



令和5年度学部入学式より



令和5年度役員等の紹介
令和4年度卒業式・学位記授与式
令和5年度学部入学式・大学院入学式

令和5年度役員等の紹介

総長

藤井 輝夫

理事・副学長

相原 博昭 経営企画、財務、資産活用
大久保 達也 総務、施設
齊藤 延人 研究、懲戒、病院
太田 邦史 教育、情報
藤垣 裕子 学生支援、入試・高大接続、評価、研究倫理
林 香里 国際、ダイバーシティ
津田 敦 150周年記念事業、社会連携・産学官協創

理事

今泉 柔剛 事務組織、法務、人事労務、コンプライアンス
石井 菜穂子 経営改革特命
岩村 水樹 総長ビジョン推進

監事

吉田 民
棚橋 元

執行役・副学長

浅見 泰司 教育改革、キャンパス長期構想
大澤 裕 ガバナンス改革、利益相反、監査
河村 知彦 コミュニケーション機能強化推進
岸 利治 環境安全、キャンパスGX、研究力強化
佐藤 健二 学術資産活用戦略
染谷 隆夫 スタートアップ、知の価値化
森山 工 学術長期構想
渡部 俊也 産学連携

執行役

福島 毅 資金運用 (CIO)

副学長

秋山 聡 地域連携推進、渉外活動推進
伊藤 たかね ダイバーシティ教育
大橋 弘 産学協創、人文社会科学組織連携
岡部 繁男 生命系国際協創、ライフサイエンスイノベーション、WPI (IRCIN)
坂井 修一 図書館
佐藤 岩夫 相談支援研究開発センター、ガバナンス改革推進戦略、ハラスメント防止
関村 直人 国際特命
丹下 健 卒業生、渉外活動推進、スポーツ連携推進、協創活動運営
堤 伸浩 GX連携、フード/アグリイノベーション
出口 敦 産学協創推進、資産活用推進、都心サテライト拠点
星 岳雄 財務戦略、国際エグゼクティブ教育、東京カレッジ
森 初果 学術経営戦略、国際協創、放射光施設、イノベーションコリドー
矢口 祐人 グローバル教育センター
吉江 尚子 男女共同参画、ダイバーシティ研究環境実現

副理事

稲垣 博明 協創活動企画調整、イノベーションコリドー
遠藤 勝之 研究倫理、研究費・研究不正対応、GX推進
蔭山 達矢 教育・学生支援
小寺 孝幸 多様な働き方の推進、人件費分析
高橋 喜博 総長業務支援統括
戸張 勝之 経理・調達
松井 正一 ダイバーシティ推進
水上 順一 DX推進
山本 貴史 SDGs・社会実装、ブランディング強化

総長特別参与

沖 大幹 ネットゼロカーボン戦略、GX国際連携
喜連川 優 DX推進戦略
坂田 一郎 FSIビジョン形成

総長特任補佐 (副学長待遇)

大越 慎一 大学院改革

総長特任補佐

有馬 孝尚 財務改革、総長ビジョン検討、IR
五十嵐 圭日子 財務戦略推進、社会連携・産学協創推進
和泉 潔 スタートアップ支援推進
稲見 昌彦 国際卓越研究大学構想推進、図書館DX推進
岩田 忠久 産学協創推進
江頭 正人 社会連携教育推進
川崎 雅司 研究力強化推進
佐藤 仁 GX国際連携推進、国際広報戦略
鈴木 綾 社会起業推進
高橋 浩之 イノベーション戦略
谷口 将紀 総長企画推進
津本 浩平 産学協創・研究力強化
中尾 彰宏 次世代サイバーインフラ活用
中村 宏 情報基盤活用
ペニンントン マイルス GX国際連携推進、リカレント教育戦略、デザインビジョン

福留 東土 STEAM教育、学術長期構想検討
松田 陽 学術資産活用推進、国際広報戦略、150周年記念事業推進
両角 亜希子 国際卓越研究大学構想推進
横張 真 キャンパス計画
渡邊 聡 国際連携推進
渡部 雅浩 GX国際連携・教育推進
割澤 伸一 産学協創・社会連携推進、イノベーションコリドー推進

新役員等の略歴と就任挨拶

新理事・副学長、新執行役・副学長、新執行役、新副学長、新副理事の略歴および就任に当たっての挨拶を掲載します。

機能拡張する大学を支える

このたび、150周年記念事業、社会連携、産学協創を担当する理事・副学長を拝命いたしました。東京大学は法人化以降、教育、研究に加え社会貢献を主要なミッションとし、その機能を拡張してきました。社会連携、産学協創は機能拡張そのものであるとともに教育研究を支える基盤としての成長を遂げています。日本も世界も東京大学も、今、大きな転換点を迎えていると感じており、この時代にキャンパスの壁を乗り越え、多くの皆様と対話し活動を広げていくことに大きな責任を感じるとともに、楽しさも感じています。また、東京大学は明治10年(1877年)4月12日、東京開成学校と東京

医学校とを合併して創設されました。4年後の2027年には創立150周年を迎えます。皆様とともにこの記念すべき節目を祝うとともに、過去を見つめなおし、未来を語る機会としたいと思います。

私自身は海洋のプランクトンを研究してきた者で、研究面では社会とのつながりは太くありませんでした。社会連携担当の執行役を2年間勤めてきましたが、かなり背伸びしてきた感があります。今年度からは、150周年、産学協創が加わり不安は大きいのですが、全力で職務に向き合う所存ですので、皆様のご協力をお願いいたします。

理事・副学長

津田 敦

TSUDA Atsushi



昭和57年3月 北海道大学水産学部卒業
昭和59年3月 本学農学研究科修士課程修了
昭和62年3月 本学農学研究科博士課程修了、農学博士
昭和63年11月 本学海洋研究所助手
平成8年4月 水産庁北海道区水産研究所室長
平成15年4月 本学海洋研究所助教授
平成23年4月 本学大気海洋研究所教授
平成25年4月 本学総長補佐
平成27年4月 本学大気海洋研究所所長
令和3年4月 本学執行役・副学長

専門分野: 生物海洋学
研究内容: 1) Tsuda, Atsushi 他25名 "A mesoscale iron enrichment in the western subarctic Pacific induces large centric diatom bloom." *Science* 300 (2003): 958-961.
趣味: バードウォッチング



東京大学の未来を見据えて

このたび教育改革、キャンパス長期構想、大学総合教育研究センター担当の執行役・副学長を拝命いたしました。どれも、大学の未来を見据えた長期的な視野を持って、対処しなければならない事項です。

教育改革で重視すべきことは、教育の信頼性の確保と教育および教育支援方法の改革です。学生の資質に合った教育方法、教育の成果を測る試験や成績評価、東京大学の教育水準の信頼性を確立しなければなりません。ICT技術の発達により、学習者個々の状況に寄り添った教育方法の選択が可能になりつつあります。他方で、ICT技術を悪用する方法も巧妙になってきています。これまでの教育方法や評価方法をそのまま維持することは、難しくなりました。そのためには、どのような改革が必要なのかを皆様と

共に考えていきたいと思います。現在開発されているUTokyo One (UTONE)は現状を打破する可能性を秘めています。ただ、これを全学展開するにはソフト自体を改善するだけでなく、教育システム自体を改革することも必要です。

キャンパス長期構想で重視すべきことは、キャンパス内の不動産の使い勝手・価値・整備の向上に加え、周辺地域を含む学外との協創によるエリア価値や大学価値の向上です。地域とのかかわりも増えてきていますが、それを体系化し大学の価値向上への歩みを進めていかねばなりません。今後の東京大学を考えると、社会と共に価値を維持し、創造していくことが大切です。任務遂行に努力していきますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

愛され、頼られる東大を目指して

この度、コミュニケーション機能強化推進担当の執行役・副学長、広報戦略本部長を拝命しました。

国際的認知度はともかく、東大のことを知らない日本人は多いと思います。世間一般の東大に対するイメージは必ずしも実態とあっておらず、誤解されていたり、知られていない部分も多いと思います。東大の持てる力を社会のために十分に活用できていないかもしれません。

私は、東日本大震災後に岩手県大槌町のセンターに赴任し、津波や地震の海洋生態系への影響を調べるとともに、被災したセンターの復旧にあたりましたが、ある時、地域の方から「東大が何をやっているのかわからない、地元の役には立たない」と言われ、大きなショックを受けました。これをきっかけに、どうしたら地域

に貢献できるか、愛される研究所になれるかをセンター教職員一丸となって考え、社会科学研究所の皆さんとともに「ローカルアイデンティティ」と「対話」をキーワードにしたプロジェクト「海と希望の学校 in 三陸」を始めました。その後、大気海洋研究所の所長を拝命し、こんどは大気海洋科学で地球環境問題を解決すること、大気海洋科学のファンを増やすことを考え、所の教職員と一緒にいろいろな改革を行いました。

今回、東大全体のコミュニケーション機能強化と広報の担当を仰せつかりましたので、東京大学がより多くの皆さんにさらに愛され、頼りにされる存在になるための仕掛け作りを皆さんと一緒に考えたいと思います。ご指導、ご協力いただきますようお願いいたします。

社会変革を先導する挑戦者の育成

このたび、スタートアップ、知の価値化を担当する執行役・副学長を拝命いたしました。スタートアップ支援やアントレプレナーシップ教育などを分担いたします。

これまでの3年間、工学系研究科長・工学部長を務めて参りました。この間、企業や地域との連携を中心とした社会連携、さらに系統的なアントレプレナー育成プログラムの構築などに力を入れて研究科の教育研究活動を進めてきました。

申し上げるまでもなく現代社会が直面する課題は困難さと複雑さを増しています。気候変動に伴う自然災害の大規模化、新型コロナウィルス感染症の長期化、地政学的な緊張の高まり、

エネルギー危機など難題が、わたくしたちの想像を超えるスピードで変化し続けています。社会に横たわる課題の本質を見抜き、新しいアイデアで具体的な解決方法を構想し、そして自ら行動する。この一連のアクションこそが、アントレプレナーシップといえます。将来どのようなキャリアを選択しようと、アントレプレナーシップ・スピリッツは重要です。アントレプレナーシップ教育を推進し、多くの部局と連携しながら、より良い未来の実現にむけて社会変革を力強く先導する人材の育成ならびにスタートアップの支援に貢献して参りたく存じます。

みなさまのご理解とご支援を何卒よろしくお願ひいたします。

執行役・副学長

浅見泰司

ASAMI Yasushi



昭和57年3月 本工学部卒業
昭和62年5月 ペンシルヴァニア大学地域科学専攻修士課程修了 (Ph.D.)
昭和62年5月 本工学部助手
平成2年10月 本工学部講師
平成4年10月 本工学部助教授
平成13年4月 本学空間情報科学研究センター教授
平成22年4月 本学空間情報科学研究センターセンター長
平成24年4月 本工学系研究科教授
平成29年4月 本工学系研究科副研究科長
令和2年4月 本学副学長
専門分野: 都市計画学、不動産学、空間情報科学
研究内容: 1) H. Nishi, Y. Asami, H. Baba & C. Shimizu "Scalable spatiotemporal regression model based on Moran's eigenvectors" *International Journal of Geographical Information Science*, 37(1) (2023): 162-188. 2) M. Suzuki, S. E. Ong, Y. Asami, C. Shimizu "Long-run renewal of REIT property portfolio through strategic divestment" *Journal of Real Estate Finance and Economics*, 66(1) (2023) 1-40.
趣味: パズル、テニス

執行役・副学長

河村知彦

KAWAMURA Tomohiko



昭和61年3月 本学農学部卒業
昭和63年3月 本学農学系研究科水産学専攻修士課程修了
昭和63年4月 水産庁東北水産研究所研究員
平成6年10月 博士 (農学) 学位取得
平成12年7月 本学海洋研究所助教授
平成24年5月 本学大気海洋研究所教授
平成26年4月 本学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター長
令和元年4月 本学大気海洋研究所所長
専門分野: 海洋生態学、水産資源生物学
研究内容: 1) Takami H., Won NI. and Kawamura T. "Impacts of the 2011 mega-earthquake and tsunami on abalone *Haliotis discus hannai* and sea urchin *Strongylocentrotus nudus* populations at Oshika Peninsula, Miyagi, Japan." *Fisheries Oceanography* 22 (2013): 113-120. 2) Kawamura T., Roberts RD. and Takami H. *Importance of periphyton in abalone culture. Periphyton: Ecology, Exploitation and Management*. Wallingford (UK): CABI Publishing, 2005.
趣味: バードウォッチング、昼休みサッカー、カタツムリ採集

執行役・副学長

染谷隆夫

SOMEYA Takao



平成4年3月 本工学部電子工学科卒業
平成9年3月 本工学系研究科電子工学専攻修士課程修了 博士 (工学)
平成9年4月 本学生産技術研究所助手
平成10年4月 本学生産技術研究所講師
平成12年1月 本学先端科学技術研究センター講師
平成14年5月 本学先端科学技術研究センター助教授
平成15年5月 本工学系研究科助教授
平成21年4月 本工学系研究科教授
令和2年4月 本工学系研究科長・工学部長
専門分野: 半導体工学
研究内容: 1) Someya, T., Bao, Z. & Malliaris, G. "The rise of plastic bioelectronics." *Nature* 540 (2016): 379-385
趣味: 散歩、写真撮影

活力を発揮すればこそその多様性へ

2021年度の東京大学入学式で教養学部長として辞書を述べたわたしは、聖アウグスティヌスのことばを引用しました。それは、もし万物がみな同じであったなら、万物は存在しないことになるであろうということばでした。

ここには万物の多様性が語られています。あなたとわたしが同一であったなら、あなたもわたしも存在しないことになる。あなたが存在し、わたしが存在するためには、あなたとわたしとの非同源性が必要である。これを万物に敷衍して述べれば、そこには万物の多様性が必要である。

このたび、学術長期構想を主担当として、執行役・副学長に就任しました。本学における研究の多様性。これについては論を待ちません。

他方で教育、とくに学部教育については、学生の同質化傾向が夙に論じられてきました。

わたしが構想するのは、同質化傾向に屈することなく、みずからの個性を発揮しようとする学生を育成することです。他者と同一であるがゆえに存在しないことになってしまうのではなく、他者と違うからこそみずからも、そして他者をも独自の存在として活かすことができるような学生を育成することです。たんなる雑多なものの寄せ集めでなく、それが活力となるような多様性。そういう学生を育成するために、どのような教育が必要なのか、そしてまた、そのような教育を施すためにはどのような学生を入学させるべきなのか、学術長期構想という観点から考えたいと思います。



執行役・副学長

森山 工

MORIYAMA Takumi

昭和59年3月 本学教養学部教養学科卒業
昭和61年3月 本学社会学研究科修士課程修了
平成6年7月 本学総合文化研究科博士課程修了
平成12年4月 本学総合文化研究科助教授
平成24年4月 本学総合文化研究科教授
令和3年4月 本学総合文化研究科長・教養学部長
専門分野：文化人類学

研究内容：1) 森山 工「贈与と聖物——マルセル・モース『贈与論』とマダガスカルの社会的実践」東京大学出版会、2021年。
2) 森山 工「贈与論」の思想——マルセル・モースと〈混ざりあい〉の倫理」インスクリプト、2022年。

資産運用は、低金利の終焉とともに新たな局面へ

このたび、35年間務めた資産運用業界を離れ、初めて資産オーナー側の執行役・資金運用担当に就任いたしました。ファンドマネジャーとして、先進国、新興国のグローバル株式・債券への投資や、資産配分の決定を行ってまいりました。平成12年からは各社で最高投資責任者（CIO）として、運用部門のマネジメントも担当し、合併統合の実務を3度経験しました。ブラックロック社では、中長期経営戦略が明確で、ガバナンス体制の強い日本企業20社強に集中投資する「ガバナンス・フォーカス・ファンド」を設定、運用を担い、企業経営者との対話エンゲージメントを進めました。

世界の金融市場では、インフレ率と経済活

動が安定し、金融資産の収益率が高い投資環境“The Great Moderation（偉大なる安定期）”が約20年続きましたが、終焉を迎えました。ポスト・コロナ時代は、グローバル化の停滞、地政学リスクの高まり、中国を筆頭に主要国の高齢化に伴う生産人口の減少などから、インフレ、市場変動率の上昇との共存が必要になります。日本でも、日銀による長期金利上限の修正・撤廃が予想されています。こうした新しい投資環境の中では、伝統的な資産配分から、より柔軟で耐性のあるポートフォリオ構築が求められます。財務部資金運用チームとともに、金融市場の不確実性が高まる中、リスク調整後のリターン最適化にむけて挑戦していきます。



執行役

福島 毅

FUKUSHIMA Takeshi

平成3年5月 Columbia Business School 修了 MBA
昭和62年8月 日興証券投資信託委託（現日興アセットマネジメント）
平成7年2月 日本バンカーストラスト信託銀行（現ドイチェ・アセットマネジメント）平成12年より常務執行役員CIO
平成20年10月 明治ドレズナー・アセットマネジメント（現明治安田アセットマネジメント）執行役CIO
平成27年3月 GIキャピタル・マネジメント CIO
平成28年5月 ブラックロック・ジャパン 取締役CIO
専門分野：CFA/Chartered Alternative Investment Analyst
趣味：大相撲観戦、鉄道の旅、食べ歩き

熊野の歴史に学びつつ

この度、地域連携・渉外活動促進担当の副学長を仰せつかりました。この二年間、人文社会系研究科長・文学部長として、和歌山県熊野地方の中核都市新宮市との地域連携活動を中心としつつ、人文学を応用・活用しての各種連携活動の推進可能性を模索して参りました。今年度からは、既に様々な部局が展開して来られた様々な地域連携活動の更なる発展と、個々の地域連携活動間の更なる連携を図ることを課題としてお思います。

部局長就任時に、理事の方から、文学部も寄付活動により積極的に取り組んだらどうか、と言われた際には途方に暮れたものですが、社会連携本部にお世話になりつつ、試行的にはありますが、いろいろと推進する方向に舵を切っ

て参りました。今般、その社会連携本部に身を置くことになり、些か戸惑ってもあります。しかし、地域連携活動を展開してきた熊野は、古来「勸進」を重視してきたことで知られています。「勸進」とは英語で言うところのファンド・レイジングにあたります。熊野は古くから全国に向けて様々にその魅力を発信しつつ、勸進に成功し、かつては蟻の隊列のように人々が熊野に詣でたと言ひ、「蟻の熊野詣」と呼ばれたようです。古来、あらゆる人々を受け入れ、かつ様々にその魅力を喧伝してきた熊野の歴史に学びつつ、人文学的な観点を盛り込んだ地域連携・渉外活動推進に微力を尽くせればと願っております。どうぞよろしくお願いたします。



副学長

秋山 聡

AKIYAMA Akira

昭和61年3月 本学文学部卒業
平成元年3月 本学人文科学研究科修士課程修了
平成5年3月 本学人文社会系研究科博士課程単位取得満期退学
平成7年2月 フライブルク大学哲学部博士課程修了
平成7年4月 電気通信大学電気通信学部助教授
平成9年4月 東京学芸大学教育学部助教授
平成18年4月 本学文学部助教授（19年～准教授、23年～教授）
令和3年4月 本学人文社会系研究科長・文学部長
専門分野：美術史学

研究内容：1) 秋山聡「聖遺物崇敬の心性史 西洋中世の聖性と造形」講談社 2009年（2018年） 2) Akira Akiyama, Relic or icon? : the place and function of imperial regalia, In: *The nomadic object*, Brill 2018, pp.430-447
趣味：西洋古典音楽鑑賞（とりわけヘンデル、ハッセ等のバロックオペラ）、古社寺を訪ね、修験の道歩くこと、盤座探訪等

学術の進化と東京大学

2年間医学系研究科長・医学部長を務めさせていただき、この4月からは副学長として少し違う立場で東京大学の運営のお手伝いをさせていただくことになりました。担当は「生命系国際協創、ライフサイエンスイノベーション、WPI (IRCIN)」と少し長いので、内容がわかりにくいかもしれませんが、医学や生命科学に関連した東京大学のアクティビティを更に活性化し、国際性を高めるためのアイデアを出し、それを実現することが重要なミッションなのだと思っています。生命の不思議さは長い進化の過程で多様性を獲得しつつ、生物種は競争しながらも共存し、動的な調和を維持してき

た所にあると思います。過去には地球規模の気候変動のような危機的状況を経験しながら、しぶとく生命は性質を変化させ、相互に助け合い、繁栄を継続してきました。SDGsは人類にとっての重要な課題ですが、地球上の生物が何億年にもわたるsustainable developmentを実現してきたことは驚異です。生物をお手本にして学術も多様性を拡大しつつ、競争と調和により次の段階へと進化していく必要があります。東京大学の生命科学研究の多様なリソースや人材を活用して、次世代型研究の見本となるような活動を生み出していければと思います。

試される大学の総合力

GX連携とフード/アグリイノベーションを担当することになりました。いずれも私たちが直面している地球規模課題そのものであり、相互に関連しています。

GXに関しては温室効果ガスの排出削減が大きな目標となっています。最近では生物多様性保全の観点も重視されるようになってきました。食料は言うまでもなく人類の生存に必須です。耕地の拡大、肥料や農薬の利用、機械化、これらに適合した品種の作出によって食料生産は効率化され、世界人口の増加を支えてきました。ところが、食料の生産、流通、消費の過程で、温室効果ガスの排出や生態系の破壊、水資源の過剰利用など、私たちは大きな環境負荷を与え続けています。

良質なエネルギーと良質な食料を持続的に生産し、公正に分配することが求められており、今すぐにグローバルな視点で解決しなければなりません。その一方で、それぞれの地域の持つ風土や歴史、社会構造に適した解決策を構築する必要があります。

これらの課題は多元的であり、それぞれの要素はしばしばトレードオフの関係にあります。トレードオフを回避するための知恵を、本学が持つ総合力で生み出していくことが社会から要請されています。大学構成員のみならずの力を結集することのできるような場を作ることに、少しでも貢献したいと考えております。よろしくご協力をお願い申し上げます。

不易と変化が共存する学びの場から都市へ

この度、産学協創推進、資産活用推進、都心サテライト拠点を担当する副学長を拝命しました。私自身は都市工学を専門とし、2016~2020年度にはキャンパス計画室長を務めさせていただきました。大学キャンパスは都市と同様に永遠に未完成であり、伝統的な不易の空間と時代の要請に合わせてつくり変えていく変化の空間が共存する創造的活動の場です。加えて、メタバースなどのサイバー空間を含め、いまや大学キャンパスの概念は変革を遂げようとしています。

かつて滞在したウィーン工科大学は明確なキャンパスを持たず、ウィーンの街なかに施設が分散しており、いわば都市がキャンパスでした。シラバスも書店で販売しており、学ぶ意欲の高い市民が学生と共に大学の授業を聴講していま

した。欧州最古の大学があるポローニャ、サラマンカなどの欧州都市では明確なキャンパスを持たない大学も少なくありません。それに対し、一般にこれまでの日本の大学は主として従来のキャンパスの境界の中で高度な教育研究活動を集約させてきましたが、本学でも藤井総長の下、UTokyo Compassの方針に基づき、新たなキャンパス像を創造することになると思います。社会人を含め誰もが学びやすい環境を求めて都市に積極的に出ていくと共に、都市と一体となった起業の場や民間企業との産学協創の場づくりを目指すことになると思っています。そのために微力を尽くして参りたいと思っておりますので、よろしくご協力をお願い申し上げます。

副学長

岡部 繁男

OKABE Shigeo



昭和61年3月 本学医学部卒業
昭和63年9月 本学医学部助手
平成5年5月 米国立保健研究所客員研究員
平成8年6月 工業技術院 生命工学工業技術研究所 主任研究官
平成11年4月 東京医科歯科大学医学部教授
平成19年9月 本学医学系研究科教授
令和3年4月 本学医学系研究科長・医学部長
専門分野：神経細胞生物学
研究内容：1) Y. Sugiyama他4名, "Determination of absolute protein numbers in single synapses by a GFP-based calibration technique." *Nature Methods* 2 (2005): 677-684. 2) Y. Kashiwagi 他6名, "Computational geometry analysis of dendritic spines by structured illumination microscopy." *Nature Communications* 10 (2019) 1285.
趣味：鍵盤楽器演奏

副学長

堤 伸浩

TSUTSUMI Nobuhiro



昭和58年3月 本学農学部卒業
昭和63年3月 本学農学部研究科博士課程修了
昭和63年4月 日本学術振興会特別研究員
平成2年1月 本学農学部助手
平成8年4月 本学農学部助教授
平成14年8月 本学農学生命科学研究科教授
令和元年4月 本学農学生命科学研究科長・農学部長
専門分野：植物分子遺伝学
研究内容：1) Hideki Takanashi, Mitsutoshi Shichijo, Lisa Sakamoto, Hiromi Kajiya-Kanegae, Hiroyoshi Iwata, Wataru Sakamoto, Nobuhiro Tsutsumi. "Genetic dissection of QTLs associated with spikelet-related traits and grain size in sorghum." *Scientific Reports* 11:9398 (2021)

副学長

出口 敦

DEGUCHI Atsushi



昭和59年3月 本学工学部都市工学科 卒業
平成2年3月 本学工学系研究科博士課程 修了
平成2年4月 日本学術振興会 特別研究員
平成4年4月 本学工学部都市工学科 助手
平成5年4月 九州大学工学部建築学科 助教授
平成18年1月 九州大学大学院人間環境学研究院 教授
平成23年4月 本学新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻 教授
令和3年4月 本学新領域創成科学研究科 研究科長
専門分野：都市計画学、都市デザイン学
研究内容：1) 「ストリートデザイン・マネジメント」(共編著、学芸出版社)、2) 「都市計画の構造転換」(共編著、鹿島出版会)、3) 「Society 5.0」(日立東大ラボ編著、日本経済新聞出版社)
趣味：ラグビー、スポーツ観戦

インクルーシブな大学をめざして

このたび副学長を拝命し、相談支援研究開発センター、ガバナンス改革推進戦略、ハラスメント防止を担当することになりました。

このうちガバナンス改革推進戦略は、一昨年度に執行役・副学長、昨年度に総長特別参与として担当した業務の延長となります。本学は現在大きな転換期を迎えつつありますが、本学が教学と経営の両面でさらなる発展をとげる基盤として、本学の伝統をふまえた自律的で機能的なガバナンスのあり方を検討、整備するお手伝いをさせていただきます。

相談支援研究開発センターの業務をはじめとなりますが、これまで自身の研究の一部として行ってきた法律相談・法的支援の研究の知見でも、相談支援体制の強化は、真にインクルーシブな社会を構築するうえで重要な要となる施

策と位置づけられています。藤井総長のもと、UTokyo Compassでは、「多様性と包摂性」および「世界の誰もが来なくなる大学」を基本理念として掲げていますが、本学における相談支援体制の充実・強化はこれらの基本理念の具体化と深く結びついています。ハラスメント防止もまた、多様なバックグラウンドをもつ構成員が、相互の人格と生き方を尊重し、のびのびと活動を行っていくうえで重要であることはいうまでもありません。多様性と包摂性を備えた東京大学を実現し、「世界の誰もが来なくなる大学」の理念をさらに「世界の誰もが来て良かったと思える大学」にまで発展させることをめざして微力を尽くしたいと思います。

どうぞ宜しくお願いいたします。

米国の総合大学での経験も活かして

このたび、副学長を拝命しました。財務戦略、国際エグゼクティブ教育、東京カレッジを担当します。

UTokyo Compassにあるように、自律的で創造的な大学活動のためには、経営力の確立が不可欠です。その経営力の重要な一部が財務戦略です。財務担当理事の相原先生を少しでも助けられることができれば幸いです。令和3年4月から2年間、経済学研究科長を務めていた時には、藤井総長と相原理事のご支援の下、経済学研究科の財務基盤の確立に努め、余剰資金を本部で信託運用してもらった仕組みなどを作りました。今度は全学レベルの財務基盤発展にお役に立てればありがたいと思います。

国際エグゼクティブ教育は、その具体的な内

容はこれからですが、リカレント教育をはじめとする社会連携担当理事の津田先生、国際担当理事の林先生、教育担当理事の太田先生、そして学生支援担当理事の藤垣先生とご相談しながら、作っていくのを楽しみにしております。

東京カレッジの方は、その副カレッジ長も、この4月から拝命しましたので、本部と密接に連絡をとって、このユニークな機構の発展に努力したいと思います。

経済学研究科長在任中の経験だけでなく、令和元年9月に本学に赴任する前に所属した米国の総合大学での経験も活かしつつ、任務遂行のために努力する所存です。どうかよろしくお願いたします。

学外組織との協働による知のプラットフォームの構築

このたび、学術経営戦略、国際協創、放射光施設、イノベーションコリドーを担当する副学長を拝命いたしました。UTokyo Compassは、「対話による創造」が謳われており、学内にとどまらず、学外組織との協働による知のプラットフォームの構築およびその活動推進は重要な課題です。

その中で、2018年にスタートした「つくば-柏一本郷イノベーションコリドー」構想は、柏IIキャンパスを拠点として、この5年大きく発展しました。今後も、OPERANDO-OIL(先端オペランド計測技術オープンイノベーションラボラトリ)活動や産学官民連携棟における新しい学融合研究活動の推進、TIA(つくばイノベーションアリーナ)の活動支援など、産学官

民の交流拠点としての活動を推進する予定です。

さらに本学では、国際連携を真に進めるため、東京大学の海外拠点を作り、本学の研究者らが海外の研究者らと共に知のプラットフォームを立ち上げ、互いの強みを生かした世界最先端のユニークな研究や次世代育成を推進し、国際協創の場とすることを目標としています。そして、これらの活動を進める上でも、研究データを活用しながら、学術経営戦略としてリサーチインテリジェンス機能を強化することも重要です。

これらの課題に対し、部局長、総長特任補佐の経験を生かして、皆様と協力しながら諸活動を進めていく所存ですので、どうぞよろしくお願申し上げます。



副学長

佐藤 岩夫

SATO Iwao

昭和56年3月 東北大学法学部卒業
昭和57年4月 東北大学法学部助手
平成4年4月 大阪市立大学法学部助教授
平成12年3月 博士(法学)(東北大学)
平成12年10月 本学社会科学研究所助教授
平成17年10月 本学社会科学研究所教授
平成30年4月 本学社会科学研究所所長
令和3年4月 本学執行役・副学長
令和4年4月 本学総長特別参与
令和5年4月 本学相談支援研究開発センター特任教授
専門分野: 法社会学
研究内容: 1) 佐藤岩夫「司法の法社会学Ⅰ: 個人化するリスクと法的支援の可能性」[同Ⅱ: 統治の中の司法の動態] 信山社, 2022年 2) 佐藤岩夫「市民社会の法社会学: 市民社会の公共性を支える法的基盤」日本評論社, 2023年
趣味: 建物鑑賞、山歩き



副学長

星 岳雄

HOSHI Takeo

昭和58年3月 本学教養学部卒業
昭和63年6月 Massachusetts Institute of Technology, Ph.D. in Economics
昭和63年7月 University of California, San Diego, Graduate School of International Relations and Pacific Studies, Assistant Professor
平成6年7月 同 Associate Professor
平成12年7月 同 Professor
平成14年7月 同 Pacific Economic Cooperation Professor of International Economic Relations
平成24年12月 Stanford University, Freeman Spogli Institute for International Studies, Henri and Tomoye Takahashi Senior Fellow
令和元年9月 本学経済学部教授
令和3年4月 本学経済学研究科長・経済学部長
専門分野: 金融、マクロ経済学、日本経済論
研究内容: 1) *The Political Economy of the Abe Government and Abenomics Reforms* (Co-edited with Phillip Lipsky) Cambridge, UK; Cambridge University Press, 2021.
2) *The Japanese Economy, 2nd Edition* (Co-authored with Takatoshi Ito) Cambridge, MA; MIT Press, 2020.
趣味: ゴルフ、スポーツ観戦



副学長

森 初果

MORI Hatsumi

昭和59年3月 お茶の水女子大学理学部化学科卒業
昭和61年3月 お茶の水女子大学大学院理学系修士課程修了
昭和61年4月 本学物性研究所文部技官
平成元年4月 (財)超電導工学研究所研究員
平成4年3月 理学博士学位取得(東京大学)
平成13年9月 本学物性研究所助教授
平成22年4月 本学物性研究所教授
平成30年4月 本学物性研究所長
令和4年4月 総長特任補佐(副学長待遇)
専門分野: 分子性固体科学
研究内容: 1) M. Ito, H. Mori* et al., "Ambipolar Nickel Dithiolene Complex Semiconductors: From One- to Two-Dimensional Electronic Structures Based upon Alkoxy Chain Lengths", *J. Am. Chem. Soc.* 145 (2023): 2127-2134. 2) T. Isono, H. Mori* et al., "Hydrogen bond-promoted metallic state in a purely organic single-component conductor under pressure", *Nature Commun.* 4 (2013): 1344(1-6).
趣味: スロージョギング、音楽鑑賞

多様な働き方の推進に向けて

このたび、多様な働き方の推進、人件費分析担当の副理事を拝命いたしました小寺孝幸と申します。どうぞよろしくお願いたします。

本学では、藤井総長のもとに、UTokyo Compassの基本理念において、「世界の誰もが来なくなる大学」の実現を目指し、教職員の働き方の再点検を進め、雇用のシステム整備に取り組む方針が掲げられております。

新型コロナウイルスの流行は、これまでの働き方を大きく一変させ、在宅勤務の本格的な導入につながりました。本学では、当初の感染予防対策としての運用からさらに歩みを進め、令和4年4月から、ウィズコロナ、ポストコロナに対応した働き方として、適切な労務管理の

とに、より柔軟に在宅勤務が可能となる制度の運用が開始されました。

令和5年度からは、職員の定年年齢の段階的な引上げが行われます。雇用の安定を確保するための人件費財源に留意しつつ、職員が個々の事情に応じた多様な働き方を選択でき、将来の働き方がより具体的にイメージできるキャリアパスを構築していくことが課題と考えます。

多様な働き方の推進に向けて、教職員一人ひとりが仕事を通じて生きがいを感じ、意欲・能力を發揮できる環境づくりに、微力ではありますが、少しでも貢献してまいりたいと思います。皆様のご支援とご協力をよろしくお願いたします。



副理事

小寺孝幸

KODERA Takayuki

昭和60年4月 本学採用
平成23年4月 教養学部等総務課長
平成25年12月 東京学芸大学総務部人事課長
平成28年4月 経済学研究科等事務長
令和2年4月 教養学部等事務部長
趣味：旅行、野球観戦

新たな組織の拠点として

このたび、総長業務支援統括担当の副理事を拝命いたしました高橋です。

教員、職員、学生という立場が異なる多様性のある構成員にて形成され、それぞれが自由に意見し、広く大学の活動に参画する事ができる特有の文化を持った大学にて、これまで、本学の職員として主に教育研究推進業務を行う学生支援、社会連携や法人業務を行う事務部門に従事してまいりました。

本学は、東京大学憲章の理念や目標を具体化するために、藤井総長のもと、「対話から創造へ」「多様性と包摂性」「世界の誰もが来なくなる大学」を基本理念としたUTokyo Compassが策定されました。

また、東京大学憲章やUTokyo Compassの方針をさらに発展させる取り組みとして、新たな大学モデルの構築を行うべく方向に舵を切り進んでおります。

新たな大学モデルの構築を行うには、教員、職員、学生の構成員からまた部局としての意見等の声に耳を傾け、対話を基本路線とすることが、最も大切な事と思っております。

総長業務支援統括担当として、新たな組織の拠点の一助になればと考えております。

また、これまでの経験を活かし、総長をはじめ、理事及び副学長の皆様のお役にたつことができればと思っておりますので、よろしくお願申し上げます。



副理事

高橋喜博

TAKAHASHI Yoshihiro

平成元年4月 本学採用
平成23年4月 教養学部等学生支援課長
平成27年4月 本部学生支援課長
平成30年4月 本部社会連携推進課長
令和3年4月 生産技術研究所事務部長
趣味：サーフィン、登山

退任の挨拶

前年度で退任された執行役・副学長と副学長の挨拶を掲載します。

コミュニケーションと入試改革

この2年間、執行役・副学長としてコミュニケーション機能強化推進と入試改革に取り組んでまいりました。

コミュニケーションについては、従来の「広報」に収まらない、様々なステークホルダーとの双方向コミュニケーションを目指しました。「総長対話」で司会を務めるなか、総長が強調されてきた対話の価値を実感しました。また、部・課を横断するコミュニケーションチームを結成して、キャンペーンを展開しました。そして研究成果の発信に加え、大学と社会とつながることに力点を置き、公式Twitterで「今日は何の日」シリーズを立ち上げたこと、時事的な内容の研究成果をタ

前執行役・副学長

武田洋幸

イムリーに配信する体制を構築できたことは思い出深いです。それれまだ道半ばですが、大学が分断されがちな社会の懸け橋となることに少しでも貢献できたとすれば幸いです。

入試については、推薦入試（学校推薦型選抜）の実施と改革に取り組み、制度改革の定着と説明会活動の強化に努めました。コロナ禍が続くなか、何とか踏みとどまれたのではと思います。

最後に、私は3月をもって本学を退職し、私立大学に籍を移しますが、協力していただいた教員と職員の方々に深く感謝するとともに、外から本学の発展を見守りたいと思います。

いま産学協創は加速度的発展段階に

気づいてみると6年間も産学協創担当の副学長を務めていました。この間、産学協創のゼロからの立上げ、浅野地区の産学協創拠点の計画づくり、基盤づくり（企業懇談会、ラボ長会議、UTokyo Compass、コーディネーター人材要件、利益相反マネジメント、GXシンポジウム等）に関わりました。ご一緒した企業は日立、NEC、ダイキン、住友林業、三井不動産、日本ペイント、クボタ等、テーマもエネルギー・環境、まちづくり、空気・空調、コロナ感染対策、木と森林、食・水と多岐にわたり、FSI本部ラポイニシアティブ座長も務めました。正直なところ、教員や企業の皆様に産学協創の意義を理解

前副学長

吉村 忍

いただき、ビジョンづくりを行い、産学協創ならではの研究プロジェクト等を組成していくこと、それらを東大、企業、社会のいずれにとっても価値あるものと一緒に作り上げていくことは容易ではありませんでした。しかし、それらは、知的にも社会的にも刺激的でクリエイティブな経験であり、楽しみながら参加していました。いま産学協創はUTokyo Compassのもと定常的發展、加速度的発展段階に入りつつあり、今後は一教員として貢献できればと思います。これまで、本部役員・職員の皆様、部局長の皆様、教員の皆様には多大なご支援をいただき心よりお礼を申し上げます。



令和4年度学位記授与式



令和4年度学位記授与式が、3月23日（木）に、安田講堂において挙行されました。今年度の学位記授与式は、第一部と第二部の2回に分けて挙行され、第一部は9時00分、第二部は11時15分に始まりました。式典は音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメント ニ長調 K.136」の演奏後、総長をはじめ、理事・副学長、各研究科長並びに来賓がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。藤井

輝夫総長から各研究科の修了者代表に学位記が授与され、修了者に向けて告辞が述べられた後、来賓の宗岡正二 東京大学校友会会長から祝辞をいただきました。その後、修了生総代（第一部：学際情報学府 畑田裕二さん、第二部：理学系研究科 谷口大輔さん）から答辞が述べられ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、修了者とそのご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

総長告辞

本日、学位記を受け取られるみなさん、修了おめでとうございます。また、ご家族をはじめ、みなさんをこれまで励まし支えてくださった方々にも、東京大学を代表して、感謝の気持ちと、心よりのお祝いをお伝えしたいと思います。

みなさんは、これから社会と、そして世界と広くいろいろな形で関わり、さまざまな活動することになるでしょう。その時、重要なのは、自分を取り巻く世界がどのような状況にあるかを知ることです。

自分がいる世界の今を計測する、あるいはセンシングするにはどのような方法があるでしょうか。センシングとは、音や光、温度や

圧力などの物理量を検出する感知器（センサー）によって対象の情報を取得する技術です。最初に思いつくのは、人工衛星を使って宇宙から地球を計測する、リモートセンシングかもしれません。最近では毎年1,000基以上の人工衛星が新たに打ち上げられ、今現在、約8,000基の人工衛星が地球を周り続けています。そのおかげで、地球上のあらゆる地域の現在を、宇宙から詳細にセンシングできるようになりました。

最近ではニュースなどで、壊れた戦車や倒れた人々、破壊された建物などの衝撃的な衛星画像を見て、心を痛めた方も多くかと思えます。そういった痛ましい画像もまた、地上の現実を知るうえで、非常に重要な役割を果たしています。

人工衛星から地球をセンシングする技術は、実は世界的な平和を目指した多くの国々の協力から発展しました。

1957年7月1日から1958年12月31日まで続いた国際地球観測年は、日本、アメリカ、旧ソビエト連邦を含む世界64ヶ国が参加した国際研究プロジェクトでした。人工衛星の打ち上げ成功や地球の周りの放射線帯であるヴァン・アレン帯の発見、南極の領有権凍結

に結びつく国際協力体制など、さまざまな成果を挙げます。

このプロジェクトに、日本はいくつもの貢献をしました。たとえば、1957年には第1次南極地域観測隊が昭和基地を開設し、現在まで65年以上にわたって南極観測を続けています。また、1958年には東京大学生産技術研究所の糸川英夫教授が中心となって、日本初の本格的な地球観測用ロケットを打ち上げ、地球の上層での風や気温の観測を行いました。この国際的な研究プロジェクトで示した成果は、第二次世界大戦後の日本の国際社会での信頼回復に大きく寄与しました。

地球センシングの研究は、東京大学の複数の部局にも引き継がれて、大きな成果を挙げ続けています。たとえば、生産技術研究所では1980年代にアメリカの気象衛星NOAAからのデータを受信するアンテナを設置し、そのデータ処理手法を開発しました。この観測データは、気象解析をはじめ自然災害観測や植生調査、農業開発の状況把握など多くの分野で活用されています。

海中のセンシングについても、成果を積み重ねています。グローブエンジニアリングというテーマで1991年に設置された寄附研究



部門では、リモートセンシングと海中ロボットを用いて、空中と海中の両方から地球を観測する技術の研究が進められました。私自身も1993年から1995年まで、ここで海中ロボットの研究を行いました。最近では、2019年に開催された海底探査技術の国際コンペティションに日本から参加したTeam KUROSHIOにおいて、生産技術研究所のメンバーが重要な一角を担いました。世界中から32チームが参加し、日本チームは2位を獲得します。地表面の7割を占めるにもかかわらず、海底地形のマップが得られているのはわずか20%程度にすぎません。数年前まではほんの5%程度しか調べられていませんでした。これに対し、たとえば月面についてはすでにその全体が観測されており、今、国際プロジェクトとして、2030年までに海洋底を100%マッピングしようという計画が進められています。

ところで、リモートセンシングを含む科学技術に対する社会からの評価は、常に光に満ちたポジティブなものばかりではありません。

科学技術の発展に対する疑問をよく表した曲として、私の大好きなアーティストであるドナルド・フェイゲンが1982年に発表したI.G.Y.という曲があります。I.G.Y.とは、先ほどの国際地球観測年の英語名International Geophysical Yearの頭文字を取ったものです。この曲は、科学技術が高度に発展した一見便利に思われる未来社会を、皮肉たっぷりに歌っています。人々は、海底トンネルでニューヨークからバリまで90分で移動し、簡単に宇宙を旅行し、人工的に気候を操作し、機械が社会的に重要な判断までしてくれる、“なんて素晴らしい世界なんだろう（What a beautiful world this will be）”、という歌詞になっています。

なぜこれが皮肉に響くのか、その理由の一つは、科学技術の平和利用と国際協力体制の構築を目指した国際地球観測年の理想とは異



なり、現実には冷戦を背景とした対立と競争のなかで、科学技術が使われることになってしまったからです。その結果として、環境問題も、人や国の不平等などのさまざまな社会問題も置き去りにされ、科学技術と実社会の課題との乖離が、人々の不信感や不安を増大させました。

このような状況への反省として、世界を物理的に計測するだけでなく、そこで生活している人々の日々の営みや実際に感じていることを含めてとらえ、センシングすることの重要性が再認識されています。

社会をセンシングする手法には、上空から見るとはならず、地に足をつけ社会の中に分け入って、問いかけて調べるソーシャル・リサーチという方法もあります。いわば、ことばによるセンシングといつてよいでしょう。ソーシャル・リサーチでは、知りたいことを質問文として書き上げた調査票を用意し、人々に問いかけて社会のありのままを調べます。

その大規模な全数調査の日本での一例が、国勢調査でしょう。これは5年ごとに実施される人口センサスであり、もちろんみなさんも対象になっているものです。

この国勢調査の起源にも東京大学が関わっています。現在の国勢調査につながる総人口調査の実施を提唱したのは、日本近代統計の祖と呼ばれる杉亨二でした。杉が東京大学の前身の一つでもある開成所の教授となったのは1864年で、やがて現在の総務省統計局長にあたる太政官正院 政表課大主記となります。杉は国全体のセンサスを行うには、小さな地域でまず実績を挙げる必要があると考え、1879年に日本初の総人口の現在調査を山梨県で実際に行いました。その経験を基に、国勢調査の必要性を訴え続け、ついに実施のための法律の制定にこぎつけます。しかしながら、1905年に実施されるはずだった第1回国勢調査は、日露戦争の影響などの理由で延期され、1920年になってようやく実行されることになります。人口センサスは、近代国家の行政の基盤であり、「社会を数量的に把握すること」は「一等国」の必須条件とされていたため、国も力を入れます。一方で、増税のための調査ではないかと趣旨を理解しない人々も多かったといえます。大規模な一斉調査ですから、国民の理解と協力は不可欠で、1920年の第1回国勢調査は、今日からは想像

できないほど盛大な国民イベントであったといえます。

19世紀から20世紀にかけて各国が威信をかけてセンサスを実施していきますが、大規模なセンシングだけに盛り込める項目はそれほど多くなく、とうてい十分なものではありませんでした。

20世紀の半ばくらいから、技法として発達し社会的に普及してくるのが、サンプリングに基づく世論調査やマーケット・リサーチです。これも問いかけて答えてくれる人々の声を集める方法であり、ソーシャル・リサーチ、すなわち社会調査の一つです。

たとえば、新聞社やテレビ局が選挙のときに国民の投票行動を調べる選挙予測や、公的機関が大きな出来事に関する住民の意見を聞くなどの世論調査などがこれにあたります。東京大学でも、農業経済や社会学の研究者が、昭和初期の農村不況下で苦しむ村落の調査をリードし、経済学者が戦後復興のなかでバラック生活者や工場労働者の調査をするなど、さまざまな学部や研究所が社会調査の実践に関わってきました。また今も、東日本大震災後に顕在化した課題について、「希望学」、街づくり、防災、避難生活などの多様な観点から社会調査を進めています。

ことばによるセンシングとしての社会調査では特に、調査される側の人と調査する側の人との間での基本的な信頼関係を構築することが重要になります。

リモートセンシングでの計測では、対象者側には測定されているという意識はなく、ある意味で客観的ではあるものの、一方的なデータとなります。それに対して、ことばによる調査はまさに対話が基本です。であればこそ、信頼関係がない場合には、調査される側が回答を拒絶したり、時には意図的にウソを答えたりすることも、正当な権利の行使でありうることを忘れてはなりません。

すなわち、調査すればすぐに本当のことが分かると考えてしまうのは、少し単純すぎるということになります。

ではなぜ、そうした対話に基づく調査を行うことが重要なのでしょうか。

それは、さまざまな人々の声に耳を傾け、実感に寄り添うことが、民主主義の根幹を支える大切な要素だからです。確かに、機械的

なセンサを活用し、ネットワーク化した情報通信技術を使って、人々の表面的な行動を広く浅くセンシングしたほうが効率的な面があります。しかし、その計測データの向こう側には、人々のさまざまな思いやナラティブがあり、それに触れることなく一方的に解釈してしまう危険性と、私たちは常に誠実に向き合わなければならないのです。

第1回国勢調査からちょうど100年の節目になる2020年に、新型コロナウイルスによる想定外のパンデミックが始まり、これまた予想を超えて、オンライン授業やリモートワーク、遠隔医療、ネットショッピングなど、サイバー空間に頼った生活が広がりました。一方で、対面式の調査の実施は極めて困難となり、対話の機会が減ったのも事実です。GPSデータにより人々の移動を計測したり、工場の稼働状況を推測したり、サイバー空間上に蓄積する痕跡から社会経済活動のあらゆる分野の現状を迅速かつ詳細にセンシングしたりすることは、たしかに不可能ではありません。世の中では、インターネット上のビッグデータやSNSのやりとりをAIで解析すれば、そのほうが効果的だし正確だという極端な意見も聞かれます。

しかしながら、忘れてはならないのは、各種の社会調査で新たなデジタル手法の開発が求められている時代だからこそ、センシングの種類ごとの可能性と限界とについて、深く考えておく必要があるということです。

冒頭で、自分を取り巻く世界がどのような状況にあるかを知ることが重要だ、と述べました。なぜ今、社会状況を速やかに知ることが重要なのかといえば、社会経済活動が国の垣根を超えたものとなり、しかも環境問題などそれぞれの国だけでは解決できない地球規模の課題が深刻化しているからです。その点で、センシングの即時性と利便性とは、新しい可能性を用意しつつあります。

来賓祝辞

只今、ご紹介頂きました宗岡でございます。東京大学校友会を代表致しまして、本日学位記を授与される皆様方に心からお祝いを申し上げます。また、ご家族の皆様方にも、重ねてお祝いを申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

特に気候変動問題については、IPCCなどの世界的な科学者の協力で、さまざまな計測データや社会活動データが共有され、それを基に地球の危機を乗り越えるための取り組みが議論されています。また、COVID-19への対処において、衛星画像やモバイル通信のデータを用いた人の集中であるとか物の流通の把握などは、共有すべき問題に新しい切り口を提供しています。

そうした時代において、新たなデータやセンシング方法をよりよく、より望ましい形で使いこなすには、従来の枠組みにとらわれない柔軟な考え方が必須であり、豊かなセンスが不可欠でしょう。

今日、東京大学を巣立っていくみなさんに、ぜひ次の三つのセンスを磨いてほしいと思います。

第一に、構想力を磨き、適切な技術を選ぶ目を養ってください。課題に応じた方法を工夫し、多様な情報を得ることに努めてください。たとえば、世界の経済格差を知ろうとするとき、夜の地球を撮影した衛星画像を見れば、煌々と明るく、夜も活動している地域と全く明かりのない真っ暗な地域との差がはっきりと分かります。実際に地域ごとの課題に取り組むためには、それに加えて、生活水準や文化を実際に聞き取る調査によって、多くの事実を知る必要があります。すべてのセンシング方法には得手不得手があるので、適切な情報を獲得して深く知ろうとする際には、計測と分析の方法を選ぶあなたのセンスが問われます。世界にあるさまざまな社会問題の現実から目を背けずに、向き合い続けることで、そのセンスを磨いてください。

第二に、データの背後にある人々の声に、いつも耳を傾けるようにしてください。現在得られているデータは、本当は社会の真実のほんの一部しか反映していないかもしれないのです。実際に現場に行つて感じる必要があります。そうして、観測されてい

ますもって、3年にも及んだコロナ禍がようやく収束に向かいつつある中で、このように学位記授与式を滞りなく開催できましたことは大変喜ばしく、藤井総長はじめ学内の関係者の皆様方のご尽力に心からの感謝を申し上げます。

さて、簡単に私の自己紹介をさせていただきますと、私は、およそ半世紀前の1970年に本

ないところにある、あるいは語られていないところに潜む、人々の痛みや苦しみへの共感を持ち続けてください。たとえば、テレビの画面に映し出された破壊された街並みの近くに、苦しんでいる人たちがいることを思いやることのできる、みなさんの内なるセンサを大切にしてほしいと思います。

最後に、センシングして得られたビッグデータに振り回されることなく、未来を見据える力を大切にしてください。そのためには、自分らしい判断力や、粘り強い思考力、そして豊かな発想力を磨くことが重要です。センシングされた情報は、いくら大量にあっても、あくまでも今に至る状況しか反映していません。これからの地球と社会をどうするのか、それはみなさんそれぞれが発想し、責任をもって創っていくしかありません。これまで東京大学で学んだことを、そこで役立ててください。自分の理想を忘れない強さと、他人の気持ちを思いやるやさしさを持って、ともによりよい社会を創りあげていく、創造的な地球市民（Global Citizen）になっていただきたいと思います。

たとえ世界がどんなに大変な状況にあったとしても、決して未来への希望を失わないでほしいと思います。そして諦めないで、これからも学び続けていただきたいと思います。世界中の誰もが先ほど触れたようなセンスを磨いていけば、前に紹介した私が好きな歌に込められていた「皮肉」を乗り越え、実感とともに

“What a beautiful world this will be

What a glorious time to be free”

と歌えるでしょう。この歌詞がみなさんの声で、素直に歌われる日が来ることを願っています。みなさんのこれからの活躍を、大いに期待しています。修了、誠にありがとうございます。

(“” は、Donald Fagen氏の「I.G.Y.」より引用)

学の農学部農業経済学科を卒業し、鉄鋼メーカーである当時の新日本製鐵に一期生として入社致しました。社長・会長を経て、現在、日本製鐵の相談役を務めておりました。2020年からは本学の全学同窓組織であります、東京大学校友会の会長も務めております。東京大学校友会は、2004年に発足致しました。他大学の同窓組織と比べますと、かなり歴史



東京大学校友会会長
宗岡正二さん

の浅い全学同窓組織ではありますが、300を超える卒業生団体と、合計約25万名もの卒業生・修了生、在学生、教職員からなる、極めて大きなコミュニティであります。校友会は、「会員が相互に親睦、協力等の活動を行うこと」、そして「東京大学の発展をグローバルに支援すること」を大きな目的としており、これらに対応した様々な活動を行ってきております。

具体的な活動につきましては、本日配布しております冊子にも掲載しておりますが、たとえば、同窓の仲間や大学との繋がりを感じて頂ける機会である「東京大学ホームカミングデー」の開催や、在学生の進路選択・就職活動への支援等を行っており、このような活動を組織的に展開していくために、皆さんには1回限りの会費納入をお願いしております。

こうした貴重な財源をもって、校友会として大学との共同プロジェクトを一層後押しすることが可能となり、また会員の皆さんのグロー

バルなネットワークづくりにも貢献できるものと考えております。皆さんには、是非とも校友会へのご参加をお願い致します。

さて、皆さんご承知のとおり、世界はここ数年、これまでの延長線上とは全く異なる、いくつかの地球規模での危機的課題に直面していると言っても過言ではないと思います。

まずは、この3年間、世界中が苦しんできた新型コロナウイルスのような地球規模でのパンデミックにどう取り組んでいくのか。発生源の特定、初動体制の在り方、更にはワクチンや治療薬の開発、医療体制の整備等々、先進諸国が一致協力していかねばならないのではないのでしょうか。

次に、今や地球上の各地域で頻発する高潮や洪水などの異常気象の原因たる地球温暖化問題に、いかに各国が取り組んでいくのか。いよいよ放置しえない喫緊の課題となっているのではないのでしょうか。

更には、経済格差から来る貧困や、国内紛争から逃避してくる大量の難民の発生にどう取り組んでいくのか。また、世界各地における、難民と既存の住民との分断と亀裂をどう解消していくのか。

そして、昨年来、ロシアがウクライナに軍事侵攻を始め、周辺地域に地政学的緊張を強いる状況に立ち至ってきています。第二次世界大戦以降、80年近く世界に平和をもたらしてきた、国連の「国家主権と国境の尊重」という基軸を、国連の常任理事国が放棄しつ

つあり、まさに、民主国家と専制国家との分断と亀裂が現実のものとなってきています。

このロシアによる軍事侵攻という問題は、世界中にエネルギーコストや食糧コストの高騰をもたらし、更には経済格差を増幅させ、地球環境問題にも逆流を起こしかねない深刻な原因にもなっているのです。一体、この先、この地球はどこに向かっていくのか。現代に生きる私たち一人ひとりがこうした課題に真摯に向き合い、課題解決に取り組んでいく必要があると考えています。

このような、かつてない複雑な環境のなかで、皆さんは、それぞれ新たな道を歩まれることとなります。今後も、学問の探求をされる方もいらっしゃるれば、ビジネスや行政などの世界で活躍される方や、各分野の専門職として活躍される方もいらっしゃるかと思います。加えて、先ほど申し上げたような地球規模での課題には、個人々の力だけで対処するのは困難ではありますが、本学の卒業生・修了生には、東大校友会のグローバルなコミュニティを中心に「スマートに群れる」ことで知の結集を図り、質の高い知性と感性、そして何よりも強い倫理観をもって、こうした難しい課題に向き合って頂くことを期待致したいと思っております。

最後になりますが、皆さんの人生の門出を重ねてお祝い申し上げますと共に、今後益々のご活躍を祈念致します。改めまして、本日は誠にありがとうございます。

答辞



学際情報学府
畑田裕二さん

本日は、このように盛大な式典を催していただき、誠にありがとうございます。式に関わってくださった全ての方々に、修了生を代表して心より感謝申し上げます。

東京大学の受験を控えた高校生だった頃、僕は自分を応援する歌を書いて、そこに「未来の場所で、声も知らない君と

歌を歌っていたい」と綴っていました。あれから10年。東京大学での学生生活は、ざらりとひかるダイヤのような日々でした。ここで出会った多くの人たちが、現在の僕を形作っています。中でも、稲妻のように僕の心を穿ち、照らしてくれる恩師に出会えたことは、人生の中でこの上ない幸運でした。Doctor of Philosophyを意味づけるphilosophyは、知を愛することに由来しています。知ることの歓びを体現する先生方の背中を見て、研究とは、外発的な目的のしがらみで雁字搦めになった好奇心を解き、世界を知る=愛する営みなのだと思いました。高鳴る心に身を委ねて、僕は思わず博士課程に来たのです。

僕が大学院で取り組み、いまでも考え続けているのは、物語的自己、つまり人生の物語をデザインする技術についてです。特に、人工的に現実感を作り出すバーチャルリアリティや、身体変容体験を作り出すアバターといった技術が人の心

に与える影響について研究していました。人の認知や行動は、身体のありように強く規定されています。それゆえアバターという身体体験を適切に設計すれば、認知や行動、ひいては自己概念やアイデンティティを、自らが望んだ方向に形作ることができると考えています。いま、計算機の作り出す情報の渦が人間の意味を絶えず問い続ける中で、それでも現実を引き受けて、自己の物語を紡いでゆく力が問われています。僕は、誰もが望んだ自己の物語を紡げる未来を、こうした技術に期待しているのです。

修士課程修了の折、僕は仲間と一緒に、clusterというメタバースプラットフォームに「バーチャルに拡張された安田講堂」を構築し、オンラインの卒業記念イベントを主催しました。バーチャル環境は今後、単なる通信手段を超えて、人が生き、歴史が蓄積されてゆく「場所」になるでしょう。そこでは既に、自己を縛っている過去という条件付けがア

バターにおいて解除され、未来に対する時間的展望の変化を経験した人たちが大勢います。研究を通じて気づいたのは、そのように自己の物語が動き出す瞬間はいつも、意図せざる帰結をもたらす他者と共にあることです。僕たちは、複雑な世界を膜によって分割し、あたかも自分が独力で自立していると錯覚してしまっています。しかし僕たちは、心臓の動きも、喜怒哀楽も、言葉を手繰るようには自在に制御できません。自己は常に既に、思い通りにならない、それゆえに愛しい他者が織りなす網目の中に投げ込まれていて、環境や関係と不可分ののだと実感しました。

季節は螺旋のようにめぐって、今年もまた春を迎えます。争い、災害、病などの記憶も引き受けながら、最も残酷かもしれない季節を、それでも僕たちは生きてゆく。ルールの決まったゲームではなく、さながら遊ぶように、自分を取り囲む世界と絶えず交渉し続けながら、意図

せざる帰結に開かれた不確実な未来を、それに関わらず希望する。僕は、そんな物語を生きたいと思っています。博士

号をいただけたといっても、これも一つの結び目。僕はこれから、何かの花になれるでしょうか。まことの花が咲く頃に、

また皆さんとお話できますように。最後に、今日まで僕たち修了生を支えてくださった全ての方々に感謝の意を表明し

て、答辞を締め括らせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

答辞



理学系研究科
谷口大輔さん

本日は先生方ならびにご来賓の皆様方の臨席のもと、学位記授与式を催していただき、修了生を代表して心よりお礼申し上げます。

私は大学院で天文学を専攻し、星や銀河といった最も基本的な天体を研究しています。我々天文学者は宇宙における未知の物事を明らかにするために、しばしば巨大望遠鏡や高性能な計算機を用いた大型研究を推進します。例えば昨年夏から科学運用が開始された6.5mジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡は、その一つの到達点とも言えるでしょう。このような大型研究が脚光を浴びる一方で、数多くの目立たない小型の研究が日々進められています。そういった研究は小さいが故に多様性や機動力の高さに長所を持ち、思わぬ道を切り拓くことがあります。私は地球惑星科学を研究している東京大学の同級生と専攻の垣根を超えた小規模なチームで共同研究を進め、気象衛星を用いた天体観測を世界で初めて行いました。

その結果、オリオン座の一等星ベテルギウスで起こった「大減光」と呼ばれる現象の原因を解明することができました。

このように、ある一つの学問分野内にとどまっていたは明らかにすることができない現象でも、分野の垣根を超えた学際研究により問題解決の糸口が見つかることがあります。東京大学は幅広い分野の研究者を擁し、このような学際研究が進みやすい素晴らしい環境を自然に備えています。重要なのは、そこから私たち自身が一步踏み出し、異分野の研究者間の自発的かつ積極的な対話を進めることだと考えています。新型コロナウイルス感染症禍が引き続いているものの、最近是人々が徐々にキャンパスに戻り、そして国内外の研究者との対面でのやり取りも再開しつつあります。今後はただ3

年前の日常に戻るだけでなく、この3年間の経験を踏まえてより洗練された対話の方法論を確立していく必要があるでしょう。

最後となりますが、本日に至るまでの大学院での研究生生活を支えていただいた諸先生方ならびに職員の皆様、ともに切磋琢磨してきた友人の皆様、そして修了生を暖かく見守ってくださったご家族ならびに地域の皆様に、修了生一同を代表して篤く感謝申し上げます。皆様のご健康と東京大学の今後のより一層の発展を祈念いたしまして、私の答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

令和4年度卒業式



令和4年度卒業式が、3月24日（金）に、安田講堂において挙行されました。今年度の卒業式は、第一部と第二部の2回に分けて挙行され、第一部は9時00分、第二部は11時15分に始まりました。式典は音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメント ニ長調 K.136」の演奏後、総長をはじめ、理事・副学長、各学部長並びに来賓がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。藤井輝夫総長から各学

部の卒業生代表に学位記が授与され、卒業生に向けて告辞が述べられた後、来賓の宗岡正二 東京大学校友会会長から祝辞をいただきました。その後、卒業生総代（第一部：薬学部 小林瑞樹さん、第二部：教育学部 菅田利佳さん）から答辞が述べられ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、卒業生とご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

総長告辞

本日ここに卒業式を迎えられたみなさんに、
本学の教職員を代表して、心よりお祝いを申
上げます。ご卒業おめでとうございます。
みなさんは、2020年から続くCOVID-19の
パンデミックにより、キャンパスに共に集い、
実験室や演習室で顔を突き合わせて学業や研
究に打ち込む時間を、自由にはもてなかつた
かもしれません。そうした苦境を乗り越えて、
この場に集っておられるみなさんの努力に、
敬意を表します。また、ご家族をはじめみな
さんを支えてこられた方々にも、感謝を込め
てお祝いを申し上げたいと思います。

コロナ禍による日常生活の変化の筆頭に、
遠隔技術の急速な浸透が挙げられます。みな
さんも授業のために導入されたオンラインミ
ーティングのツールなど、以前はそれほど頻
繁には使わなかった技術を日常的に使うよ
うになったのではないのでしょうか。コロナ禍
の下では感染防止のため、人と人との接触の回
避を強いたこともあって、私たちが好むと好
まざるとにかかわらず、これまで予想された
ことのない速さと規模で遠隔技術の応用が広
がりました。

遠隔技術は19世紀のモールス信号に代表
される電信（テレグラフ）の発明から発展し
続け、日常的にもリモコンや携帯電話で使わ
れていますが、たとえばロボティクスに関係
する技術としてテレオペレーションやテレプ
レゼンスといった領域の研究も行われてきま
した。それはさまざまなインタフェースの介
在によって新たな知覚——オンラインミー
ティングツールの場合には視覚と聴覚——を可
能にしてくれる技術だということができま
す。物理的には離れているのに距離がないか
のように感じさせ、現実には目で見えないほどに
小さいもの、あるいは近づいて覗き込めない
ものを拡大して見せてくれます。このように
距離と大きさを自由に変えることができる技
術が、人間にもたらした意味について少し考
えてみましょう。

大学でのオンライン授業の効用のいくつか
は、誰もが身近に実感したところでしょう。
COVID-19の心配がまったくなくなったと
しても、オンラインツールの便利さは完全
には手放されないと考えます。以前であれば遠
いとか時間がないなどの理由で参加を諦めて

いた催しにアクセスできる機会が増えました。
海外留学中の学生が授業に参加したり、教員
が海外出張先から講義を行ったり、国際的な
学会へのオンライン参加などの研究交流も容
易になりました。本学でも海外の大学の先生
にGlobal Fellowとして講義を行っていただ
くなど、活用が広がっています。

遠隔技術が物理的な距離の困難を、ある形
で乗り越えたことは確かですが、それならば、
もはや教室に集まる必要はない、距離の問題
は遠隔技術で解消されたのだから、と言える
のでしょうか。

おそらく、そう単純に割り切ることはでき
ないでしょう。それはオンライン授業を対面
授業に戻してほしいという、みなさんの希望
が一貫して強かったという事実からも裏付け
られます。長期のオンライン授業で孤独を味
わった後に、同級生たちが集う対面授業が再
開した時には、どこの教室でも静かな興奮と
解放感が見られました。学生も教員も、同じ
場を共有して互いの反応を、肌で直接感じ取
ることができるこの経験は、やはりかけがえ
のないのだと痛感したように思います。隔
離を余儀なくされたからこそ、対面での人と
のやりとりが貴重なものとして再発見された
とも言えるでしょう。

それでは今のオンラインツールには、何が
欠けているのでしょうか。

物理的な距離を解消するとはいっても、二
次元映像と音声とが、私たちが生活する現実
の三次元空間での複雑で複合的な距離感を再
現するわけではありません。このことを見落
としてはならないと思います。オンラインツ
ールにおける二次元の画面は、すべての人や
ものとの距離を平面化する、あるいは、すべ
ての人やものを均質な等距離に配置します。
しかし、現実の空間は立体的で奥行きがあり、
二次元の画像の遠近法だけで再現できるもの
ではありません。私たちは現実の空間のなか
で身体を動かし、同じ時間のなかで人やもの
に接近していきます。その過程では、視覚と
聴覚だけでなく、触覚や嗅覚をも用いて周囲
の環境と対象のありようを感じ取っていきま
す。近くの人には小声でささやき、遠くの人
には大きな声で語りかけるといった、その場
の空間の認識に応じた行動をすることで、空
間の奥行きを身体的に確認し、実感しています。
距離を縮めるかに思えた遠隔技術の機能が、

かえって私たちの知覚を平板化し、現実の身
体経験から遠ざけているという逆説がここ
にはあります。つまり、オンラインツールでの
対話には、現実の空間での交流が創り上げる、
身体的実感の立体性ともいべき奥行きが欠
けている、ということになります。

一方、最先端の遠隔技術は急速に進化して
います。たとえばメタバースと呼ばれる仮想
空間やバーチャルとリアルとを組み合わせた
拡張現実感など、三次元の空間的知覚を可能
とするさまざまな試みが進んでいます。

すでに、画面上に表示された自分の分身ア
バターを使って学会に参加することもでき、
まるで同じ空間にいるかのように、参加者同
士が挨拶や会話を楽しむことが可能となっ
ています。仮想空間の教育研究への活用は、特
に医学の領域で盛んで、日本VR医学会には
20年の歴史があるといえます。教育の現場
では障害のある生徒、あるいは病気療養中や
不登校の生徒などが自宅で分身ロボットを操
作して「登校」する試みもあり、二次元のオ
ンラインツールとは異なる、現実の身体感覚
に近い経験が生まれつつあります。

ご存知のように、本学では昨年9月にメタ
バース工学部が設立され、その設立記念式典
が行われたメタバース上の安田講堂には、大
勢の方のアバターが出席しました。その出発
点となったのは、バーチャルリアリティ教育
研究センター、通称VRセンターが置かれた
工学部1号館の教室であり、この部屋を仮想
空間化する学生たちの試みから挑戦が始まり
ました。カメラ80台を連結させたシステム
により、これまでに私を含む数十名がアバ
ターを作るための3Dスキャンを体験していま
す。そのおかげで2022年1月の国立情報学研
究所のシンポジウムでは、私のアバターが海
中のメタバースから講演し、そこに学生のア
バターが参加して、その場で彼らとの対談を



行うことができました。

業務訓練や、就労支援に役立つ仮想空間の開発も行われていて、そこには情報学、医学、心理学、社会学に加え、芸術や言語など、さまざまな分野での知見が深く関わっています。本学でも、手足を失った人に対するVR治療の効果を調べる医学部附属病院のプロジェクト、美術館・博物館展示の3Dスキャンデータや高精細画像などを分析に活用した人文社会科学系研究科のプロジェクト、数学における概念の可視化にこの技術を応用する数理学研究科のプロジェクトなど、多くの試みが進められています。たしかに数学の講義で黒板に書かれた図から立体を想像することが難しい場合でも、学生の手元に立体図形が出現し、さらにメタバース空間で触れたり入り込んだりすることができれば、概念が分かりやすくなり、あるいはその把握の仕方が大きく変わることも考えられそうです。

これらの試みは、やむをえず遠隔技術に頼るといった消極的な利用とは異なっています。ここではむしろ、これまでにはできなかったことを、メタバースだからこそ実現することが目指されています。

VR（仮想現実感）やAR（拡張現実感）の研究は、一面では、現実とは何かを考えることでもあります。つまり私たちが「リアル」だと感じるのはなぜか、あるいは私たちが確かに実感している「リアリティ」とはそもそも何か、という問いを突きつけるからです。おそらくメタバースのリアルさは、教室における一方的な講義よりも、深く没入し没頭するという「実感」あるいは「体験」において現れます。それゆえ、現実の環境のなかにある身体ではなかなか感じられないような、新たな「リアリティ」を得ることすら起こりえます。

私自身、かつて自分の研究のために無人探査機を用いた深海調査をたびたび行って



きました。遠隔操作型無人探査機は一般に Remotely Operated Vehicle=ROVと呼ばれ、日本にはかつて世界最深部、およそ1万900メートルの深海に潜航可能な「かいこう」というROVがありました。私がよく使用していたのは、同じく海洋研究開発機構(JAMSTEC)が保有しているハイバードルフィンというROVです。

ROVはアンビリカルケーブルと呼ばれる電源とデータ伝送を行うためのケーブルに繋がれた探査機であり、このケーブルを介して遠隔から、すなわち海面上の母船から操作して深海の調査を行うものです。照明を落とした操縦室の壁全体に広がる大型ディスプレイに表示される探査機からの映像を注視しながら操作、観測を行いますが、まさに深海の環境に自らが没入しているかのように感じます。このような経験は、もしかすると、小説を読むことに近いかもしれません。没入して読むなかで、私たちの身体と想像力は、経験したことがない作品の世界に巻き込まれていきます。

メタバースが、感覚過敏や対人不安などによって、社会参加に困難を抱える方の就労や社会復帰の支援に役立つのは、それゆえです。利用者は、アバターを身体を使って、メタバース空間内の店舗で商品を受発注して準備し、来客に対応することで、社会との関わりを取り戻していくことができます。こうした能動的な身体感覚と対話に満たされたインタラクティブな空間だからこそ、新たな「リアリティ」が生まれるのです。

翻って、人間固有の文化である言葉によるコミュニケーションについても考え直すことができるでしょう。コミュニケーションもまた一方的な発信ではなく、他者が応答してくれるという関係において成り立つものです。しかも、一回一回の応答で完結するものではありません。繰り返され、重なり合い、繋がりが合う応答の蓄積こそがコミュニケーションであり、それを支えている言葉は、いわば何世代にもわたって創られ継承された仮想現実空間なのだと考えることができます。

19世紀から20世紀にかけて、言語学、記号学や情報理論の発展とともに、言葉によるコミュニケーションの理論化が進みます。出発点は「伝達」モデルでした。言語学者フェルディナン・ド・ソシュールが『一般言語学講義』で示した「ことばの回路」の図は、2人の人物の電話での会話を外側から解説して

いるようです。情報理論の創始者クロード・シャノンもほぼ同様の「通信モデル」に数学的基礎を与えることでコミュニケーションを理論化し、構造主義言語学者ロマン・ヤコブソンは通信モデルを探り入れつつ、コミュニケーションの要因と機能に注目する総合的な言語伝達モデルを提案します。メッセージの内容を伝える機能だけでなく、「おお!」とか「ああ!」のような問投詞の機能や、コミュニケーションを開始するときの「もしもし」のような、無意味に思える表現の機能も考察の対象となっていきます。にもかかわらず、こうしたモデルの基本は「伝達」であり、発信者がエンコードして送ったメッセージを受信者が受け取り、元の通りデコードすることを想定しています。

しかしながら、私たちが日常的に実感しているように、コミュニケーションは単線の一方的な伝達でも通信でもありません。対話相手の反応をその状況のなかで確認しながら、自ら身振りや比喩などで動きを創り出し、さらなる反応を感知しながら、対話としての意思疎通を図っています。人間同士の対話は、喩えていえば「翻訳」の実践なのかもしれません。先に言及したヤコブソンは、適切な注釈、言い換えなどの言語内の翻訳だけでなく、画像から言語への変換などの記号間翻訳、すなわち、他の媒体への翻訳までも論じています。

さらに、人工知能あるいはロボティクスに関連する研究分野では、複数のロボット同士のコミュニケーションを創発させることによって、変化する環境条件のなかでも正しく機能する通信を実現しようとする試みや、生物あるいはヒトにおけるコミュニケーションの本質を構成論的に理解しようとする試みが、長年にわたり行われてきています。ハードウェアとしてのロボット同士が同一の対象物をどのように認識し合うのか、対話を通して言葉の創発を促す実験や、群ロボットシステムにおいて、空間認知に関連してロボット同士が通信シグナルを共有する動作、その創発を試みる実験など、さまざまな研究が行われてきています。たとえば群ロボットシステムのモデルで言えば、蟻や蜂に代表されるような社会性生物について知られている知見も活用され、ここでは個体の行動から集団としての振る舞いを制御するような翻訳がなされています。

こうした広がりには、先ほど論じてきた仮想空間のリアリティにも重なります。翻訳は、

一見すると分断されているように見えるもの同士の間に、実感として共通し、呼応する水脈、いわば共通基盤を見つげる探索の作業でもあると言ってよいでしょう。

ここまで、遠隔技術による距離の問題、三次元の仮想空間であるメタバースによる空間的知覚の実現と「リアリティ」の問い直し、そして、身体あるいはロボットなどの物理的な実体に基盤をおく言葉の大切さを話題にしてみました。こうしたことから、今まさに広く社会における活用が広がりつつあるメタバースやVRですが、ただ現実の身体感覚を再現するだけではなく、自分の身体では経験してこなかったこと、たとえば——動物たちの環境、他者の身体などが挙げられますが——こうしたことを「リアリティ」をもって疑似体験できる技術であろうと思います。そのことの意味を、もうい

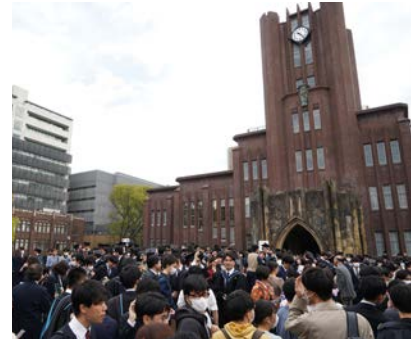
ちど深く考えてみてください。

人間は、現実の自分の狭い経験の枠に囚われず、他者の立場に立って考えることができます。他者と問いを共有し、対話を通じて未知の課題に対処していく力は、よりよい未来社会を創り上げていくうえで、不可欠です。まだまだ未成熟なメタバースの活用法についても、専門領域を超えて対話を重ね、どうしたらより望ましい方向へと発展させていけるのか、新鮮な発想が望まれます。

みなさんは本学において、各分野の学問の世界の最先端に触れてきました。ときには、その難しい内容を共有できるようにする、すなわち「翻訳」するために、かなりの時間を費やしたかもしれません。あるいは、さまざまな先端的な研究が、意外にもまったく異なる専門分野や、文理の枠を超えた多様な広が

りに繋がっているということに、率直に驚いたかもしれません。これから新たな世界への一歩を踏み出すみなさんが、そうした東京大学での経験を活かし、国内外を問わず活躍する存在として大きく羽ばたいていくことを願ってやみません。

ご卒業、誠にありがとうございます。



答辞



薬学部薬学科
小林瑞樹さん

春暖の候、吹く風に春の香りを感じる季節となりました。本日は、卒業生のためにこのような式典を催していただき、卒業生を代表いたしまして心より御礼申し上げます。また、ただいま、藤井総長、宗岡校友会会長よりお言葉を賜りました

ことに、深く感謝申し上げます。

私は、前期教養課程を経て、薬学部薬学科に進学しました。前期教養課程では、同じクラスの友人だけでなく、時には文理の壁を超えて多くの人と交流しながら、興味のあるままに講義をうけ、多様な学問に触れることが出来、教養課程ならではの有意義な経験をすることができました。

薬学部に進学し、専門知識を学んだ後は、研究と、薬局・病院での実習に取り組みました。

研究では、疾患解明、創薬への発展を目指し、痛風・高尿酸血症に関連する因子の探索を行いました。丁寧かつ確なご指導をいただきながら、主体的に研究を進めるうちに、研究室配属時点では曖昧だった「論理的」という言葉の解像度が向上し、今後の人生においても大いに役立つであろう論理的思考力、言語化能力を身につけることができました。

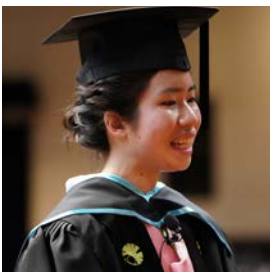
薬局、病院での実習では、生活習慣病から悪性腫瘍に至るまで広範な医療の最前線に直接触れることができたという点ではもちろん、COVID-19によって引き起こされた様々な変化をリアルタイムに現場で感じる事ができ、非常に稀有な体験だったと感じています。

この卒業のタイミングで、もう少し長いスパンで私の人生を振り返ると、「人とのかわり」の重要性を強く感じます。これまでの人生の中で思い出される記憶は、その大部分がそのとき一緒にいた友人、家族をはじめとする周囲の方々についてのものです。さらに、辛い時期を支えてくれるのも周囲の方々です。COVID-19の影響で、以前は対面で行われていた多くの行事がオンラインへと移行するなかで、一層希薄になりやすい「人とのかわり」を、今後はこれまで以上に大切にしていこうと思います。

私たちは、本日をもって東京大学を卒業します。その先では、見たことが無いような難題に直面するかもしれません。しかし、これまでに得た知識、経験などを生かし、その先に広がる可能性を見据えて果敢に挑戦することで、W杯で強豪国を破ったサッカー日本代表のように、無理難題であっても打ち破っていくことができると信じています。進路はそれぞれ異なりますが、各々が個性を活かし、世界のどこかを支えるかけがえのない人材となれるよう、精進していきたいと思えます。

最後にになりましたが、本日に至るまでご指導いただいた先生方、職員の皆様、共に学び、支え合ってきた友人たち、そして私たちを見守り、支えてくださった家族に、心より御礼申し上げます。皆様方のご健康と東京大学のより一層のご発展を祈念して、答辞とさせていただきます。

答辞



教育学部
菅田利佳さん

本日は私たちのために、素晴らしい式典を催していただき、本当にありがとうございます。また、ご多忙の中ご臨席を

賜りました皆様、様々な場所から心をお寄せくださる多くの方々に、深く感謝申し上げます。

私は、幼い頃から点字を使用して学習し、高校から通常の学校へ進学したことを機に、学ぶことの素晴らしさを感じるようになりました。また、ピアノ演奏を通じて多様な人々と心を通わせた体験から、芸術の持つ力に強い関心を抱きました。自らの恵まれた経験を社会に還元したいという志を持って入学した東京大学は、望めば望むほど、その思いを形にできる学び舎でした。

前期課程で関心の赴くままに履修した幅広い講義、教育学部で動んだ国際教育協力における音楽表現の役割に関する研究。これらは、目立ちにくい場所でサ

ポートしてくださった沢山の人がいたからこそ、成し遂げられたものでした。手を差し伸べてくださった全ての方々に、心から感謝しております。

また、文化・芸術の力を活かして若者と国連を結ぶ「東京大学UNiTe」で代表を務め、コロナ禍において特に阻害された立場にある若者や芸術界の人々の声を国連機関に届ける会議の企画など、数々のプロジェクトに携わりました。その中で、自らの境遇によって声を上げにくい人々の思いに耳を傾けることや、一人一人が得意分野を活かすことのできる組織作りなど、誰かをサポートする存在としての自身の新たな可能性に気づくことができました。

さて、大学生活の多くをコロナ禍で過

ごした私たちは、それぞれが予期せぬ困難や悲しみに向き合うと同時に、身近な人々の命や日常の尊さを痛感する日々を過ごしてきました。そのような経験をしたからこそ、得られた気づきがあります。それは、私たち一人一人が無数の側面を持ち、誰もが支援を必要とする時もあり得るということ。明日から踏み出す新しい世界でも、目立ちにくい支えに目を向け感謝する心、聞こえにくい声にこそ耳を傾け手を差し伸べる姿勢を大切に、歩んでまいります。それぞれの専門性と個性を輝かせ、多様な人々と協力しながら、より良い未来の作り手としての旅を続けることをここに誓い、答辞いたします。

令和5年度 学部入学式・大学院入学式

令和5年度 東京大学入学式



式次第

1. 開式 式辞
2. 総長 式辞
3. 教養学部長 式辞
4. 祝辞
5. 入学生総代宣誓
6. 東京大学の歌
7. 閉式

令和5年度の学部入学式と大学院入学式が、4月12日に日本武道館において挙行されました。午前の学部入学式には、約3,100名の新入生、そのご家族など約5,300名、合わせて約8,400名が出席しました。総長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓が登壇しました。式では、大学を代表して藤井輝夫総長から式辞が述べられ、続いて真船文隆 教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、来賓のグローバルファンド 保健システム及びパンデミック対策部長 馬淵俊介様、東京大学校友会 宗岡正二会長からそれぞれ祝辞をいただきました。その後、入学生総代 川上大和さん（教養学部理科二類）による宣誓が行われました。

午後の大学院入学式には、約2,800名の新入生、そのご家

族など約2,800名、合わせて約5,600名が出席しました。総長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓が登壇し、開式となりました。式では、大学を代表して藤井輝夫総長から式辞が述べられ、続いて勝野正章 教育学研究科長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の流動性および持続可能性ファシリテーター議長、国際連合 気候変動ファイナンスハイレベル・パネル共同議長 及びブルッキングス研究所シニアフェロー Vera Songwe様、東京大学校友会 宗岡正二会長から祝辞をいただきました。その後、入学生総代 李遠杰さん（法学政治学研究科）による宣誓が行われました。

両式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、新入生のご家族を含む多くの方にご覧いただきました。

令和5年度学部入学式総長式辞

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。ようこそ東京大学へ。みなさんを新たな仲間として東京大学にお迎えすることは、私たち教職員にとってもたいへん喜ばしく、本学を代表して、お祝いと歓迎の意を表します。また、ご列席のご家族や関係者のみなさまにも心からお慶び申し上げます。

本日入学されたみなさんの多くは、図らずも高校生活の3年間を新型コロナウイルス感染症の蔓延、という予想外の事態とともに過ごされたのだと思います。このパンデミックは、医療、健康、子供の成長、経済など、問題ごとにとるべき対策が異なってくる難しい側面をいまでも持っています。また、ロシアによるウクライナへの武力侵襲など、現代

社会は多くの人が想像もしなかったグローバルな危機にさらされ、5年後や10年後の状況を予測するのも難しい時代にさしかかっています。そうしたなかで、人類の誰もが幸せになるための社会がどういうものなのか、その実現に向けてさまざまな知を持ち寄り、共に解決策を探る場として、大学への期待はさらに高まっています。

東京大学はそうした動きに呼应する努力を、これまでも続けてきました。たとえば、国立大学の法人化を見すえた2003年に東京大学憲章を策定し、「世界の公共性に奉仕する大学」という理念と目標を学内外に示しました。2017年には「知の協創の世界拠点」の形成と機能拡張を掲げて、指定国立大学の指定を受けました。新たな時代における、大学の自



総長

藤井輝夫

律性・創造性のあり方を、私たちは常に模索し続けています。

国の政策でも、2020年に科学技術基本法が改正されて科学技術・イノベーション基本

法となり、「人文科学」を含むすべての分野の科学技術の振興と「イノベーションの創出」が加えられ、人文・社会・自然科学の厚みを活かして社会課題の解決に取り組む「総合知」の発揮が求められています。社会課題のほとんどは、単一の学問分野では解けない問題ばかりなので、これは必然ともいえるでしょう。大学にもイノベーションが求められています。そのイノベーションとは、技術革新のような狭い範囲においてではなく、これまでのあり方の変革という広い意味で言われているのだと私は理解しています。

そもそもイノベーションは、複数の既存の知の新しい組み合わせから生まれるもので、そのための方法は大きく二つあります。一つは、組織のなかに多様な人材を入れること。もう一つは、外に出て、多様な経験をし、人脈を広げることです。これを東京大学の近年の取り組みに重ねてみると、前者の「多様な人材」に関わるものとしてダイバーシティ&インクルージョン(D & I)宣言が、後者の「多様な経験」に関わる例として「Go Global Gateway」「FLY Program」「フィールドスタディ型政策協働プログラム」「東京大学グローバル・インターンシップ・プログラム」などの大学を社会に開く体験型の活動が浮かびあがってきます。

東京大学が2022年にD&I宣言を出したのは、世界に紛争や分断が生じるなか、多様性に関わった対話を推し進めることで、あるべき未来像を社会とともに、まず私たち自身から創り上げていきたいと願ったからです。2021年9月に発表した東京大学の基本方針である「UTokyo Compass 多様性の海へ：対話が創造する未来」の三つの基本理念の一つにも「多様性と包摂性」を掲げ、大学全体で力を入れて取り組んでいます。

たとえば昨年11月には、女性リーダー育成に向けた施策を始動しました。そこでは、大学構成員全員の意識改革に取り組むとともに、2027年度までに約300名の女性教授・准教授を新規に採用し[※]、その増加率を過去10年の2倍とすることを目指しています。東京大学では約10年前に学生の女性比率30%の達成を目指すという目標をたて、住まい支援や奨学金、さまざまなイベントの開催など、あらゆる努力をしてきましたが、残念ながらいまなお、その目標は実現できて

いません。UTokyo Compassで掲げた「世界の誰もが来くなる大学」の実現は、東京大学を女子学生のみなさんが「来くなる大学」にしていく努力、これと深く結びついていると考えています。

ジェンダーに関してだけでなく、構成員のさまざまな属性の多様性を高めることも大切です。いろいろな違いを互いに認め、包摂していくことが物事のとらえ方や発想を豊かにする。また、そこに集った人たちがのびのびとそれぞれの能力を発揮できることが、学問の場として重要だと思うからです。それは、東京大学が「世界の公共性に奉仕する大学」になるために必要なステップであると考えています。

さて、構成員の多様性が大事である一方、ここでは私たち一人一人のなかにある多様性について考えてみたいと思います。

専門用語ではイントラパーソナル・ダイバーシティ (intrapersonal diversity) といいます。一人のなかで多様な視点や均一でない経験を幅広く持つことが重要だ、つまり個人内多様性もまた大事であるという考え方です。集団としての構成員の多様性は、しばしば相互にステレオタイプを押しつけ、異質性を強調することで分断につながりかねない側面があります。したがって、これにあわせて共感の基盤となる個人内多様性を高めることが大事だと言われています。多様な考えや価値観に触れるなかで、新たな自分に気がつくこともイノベーションであり、みなさんには、そうした気づきを学生時代にたくさん実感してほしいと考えています。

さまざまな人と出会い、対話すること、未知の場所で、新たな経験をすることが大切です。それは自分自身をもイノベーションの素材にし、変革の対象とすることだといえるでしょう。

私自身、もともと工学部の船舶工学科で学び、大学院では海中ロボットの研究を行いました。船舶工学に基礎を置きつつも、主としてロボティクスの研究分野、特に機械の知能をどのように実装するか、ある意味で、現在

の人工知能(AI)に通じるような研究に取り組みました。さらに博士課程を終えてから2年ほどして理化学研究所に職を得たのですが、まったく新しいマイクロフルイディクスの研究を立ち上げることになります。

マイクロフルイディクスは、半導体微細加工技術を用いて製作するマイクロ流体デバイスを使って、近年みなさんにもおなじみの言葉となったPCR反応、さらには細胞培養など、化学やライフサイエンスに関わるさまざまな応用を目指す研究です。そこでは流体や分子に関わる物理や化学、さらには細胞やタンパク質、核酸などに関わるライフサイエンスなど幅広い分野における専門知識が必要です。理化学研究所に移るまで、分子生物学の実験など、ほとんど触れたことがありませんでしたので、私にとっては博士号を得た後もなお、まったく新しい知識や実験スキルを改めて学ぶたいへんよい機会になりました。

このように船舶工学からロボティクスの領域へ、さらにはマイクロテクノロジーやライフサイエンスへと、結果的にイントラパーソナル・ダイバーシティを高める機会に恵まれてきたといえるかもしれません。

みなさんにも、大学でのさまざまな学びや課外活動を含めて、幅広い分野に興味を広げていただき、このイントラパーソナル・ダイバーシティを高めてもらいたいと思います。

さて、東京大学では、大学内の教室での学びの大切さはもちろん、みなさんが社会のさまざまな現場に直接に触れあう機会を設けることにも取り組んでいます。コロナ禍での全面的な行動制限が緩和されて、対面での活動も増えてきていますので、ぜひチャレンジしてください。

この体験型の活動について、私は「学びを社会と結び直す」ことが大事だ、と言っています。いくつか例を挙げてお話ししましょう。たとえば、学部学生が自ら国際的な学びや体験の計画をたて、その実践を大学が国際総合力として認定する「Go Global



※300人採用は内部昇任を含む

Gateway」という制度があります。自分で考え、選び、実行するところに特徴があります。また入学直後に1年間の特別休学期間を取得し、ボランティアや就業、国際交流などの自主的な学外活動を行う「FLY Program」もあります。全国各地の地域自治体に1カ月程度滞在し、課題を持ち帰って教員や仲間と相談しながら解決策を提案、実行してみるという「フィールドスタディ型政策協働プログラム」や、ダイキン工業との産学協創から生まれた「東京大学グローバル・インターンシップ・プログラム」などもユニークです。アメリカやタイなどの生産拠点の現場に東京大学の学生が滞在して、気候変動・環境・資源などの大きな問題を含む、ものづくりあるいはその地域のビジネスや文化のさまざまな課題に取り組むという、たいへん貴重な経験を得ることができるプログラムです。2021年からはソフトバンクと連携して実施するグローバル・インターンシップもスタートし、自分で見つけた社会課題を解決するアプリやサービスなどの開発を競う「ハッカソン」や勉強会、海外研修を通じてAIやデータ活用を実践的に学べる機会を提供しています。

さらに、それぞれの教員が個性的に作り上げる「全学ゼミナール」も多彩に用意されています。私も以前に、BIOMOD (Biomolecular Design Competition) という分子ロボコンに参加する、全学ゼミナールを実施していました。BIOMODは、DNAなどの生体分子を使ってナノサイズの新たな構造や機能、いわば分子ロボットの設計や作成を大学生が行う世界大会です。当時は、参加チームが集まって最終成果発表を行うジャンボリーがハーバード大学で行われていました。実際に参加できるのは学部学生のみで、たとえば1年生が頑張るジャンボリーでのプレゼンテーションを行い、よい成績を取ったこともあります。

みなさんも東京大学が用意しているこうした体験型の学びの機会を存分に活かし、教室の中での学びを越えて、自らの学びをより豊かなものにしていただきたいと思います。

ところで東京大学はあと4年で創立150周年を迎えます。その歴史を振り返ってみると、大学が社会と深くつながりながら、新しいことを生みだしてきた多くの例があります。

たとえば、1942年から1951年のわずか9年間だけ千葉市内に設置されていた第二工学部では、民間企業でさまざまな実務を経験した若い教員などの多様な人材が集まり、実に自由な学風のもと学際的なものづくり教育が行われます。日本のロケット開発の父と呼ばれた糸川英夫先生は、中島飛行機で戦闘機の設計の経験を積んでから、航空機体学の助教授に就任しました。戦後、第二工学部の施設と人員とを引き継いで設立された生産技術研究所でスタートさせた、日本のロケット開発に関する本格的な研究は、現在のJAXA、宇宙科学研究所へとつながっていきます。また、第二工学部の卒業生たちは、戦後、自動車や家電やコンピュータや高層ビルなど、ものづくりで成功する大企業の礎となった、数多くの事業を生みだします。

そうした東京大学の実践は、理系分野に限りません。1919年に岡山県倉敷の民間研究所「大原社会問題研究所」の初代所長に就任したのは東京帝国大学経済学部教授の高野岩三郎先生で、そのもとにすぐれた研究者が集まり、当時の労働・社会問題などの調査の発展に重要な役割を果たしました。貴重な近代日本法政史料を集めた法學政治学研究科の明治新聞雑誌文庫も、1926年に博報堂創業者の寄附を基盤に試みられた研究活動でした。関東大震災で数々の歴史的資料が焼失してしまったことに対する学術資源の復興運動で、民間の研究者を含めて組織された明治文化研究会の吉野作造教授を中心に、大学のなかだけの学問では実現できなかったアーカイブスを整備していきます。明治新聞雑誌文庫は、現在、赤門の近く「史料編纂所」が入った図書館の建物の地階にあります。東京大学の学生はどなたでも閲覧できますので、ぜひみなさんも訪れてみてください。

ちなみに今年は、その関東大震災からちょうど100周年にあたります。あの災害で焼失した図書館の復興のため、1924年にジョン・ロックフェラー・ジュニアが申し出てくれた寄附金のことを思い出します。同じ年に排日移民法がアメリカで成立するという厳しい国際情勢にもかかわらず、被災地の大学に寄附された、当時の金額で400万円、現在の貨幣価値で50億から60億円にあたる支援は、本郷の総合図書館の再建に大きな役割を果たしました。

さて、「学びを社会と結び直す」とは、課題との向き合い方を自分の実践や経験から学び直すことであり、その楽しさや大きさを発見することです。

昨年11月にリリースされたChat GPTがさまざまな観点からいま注目を集めています。本学では4月3日に教育・情報担当の理事から学内向けに「お知らせ」を发出了。人工知能(AI)やロボット技術の進化した時代の大学教育では、創造性を育む基盤として経験学習が重要であると、アメリカ・ノースイースタン大学のジョセフ・E・アウン学長が「ROBOT-PROOF: AI時代の大学教育」という本で書いています。実はノースイースタン大学と東京大学は、現在、ニューヨークでの共同プロジェクトを計画中で、アウン学長とも、昨年夏にニューヨークで直接お目にかかる機会がありました。

昨年12月には、「哲学と科学の対話」をテーマに開催した国際会議Tokyo Forumでボン大学のマルクス・ガブリエル教授がたいへん興味深い問題提起をされていました。彼は哲学の研究者ですが、グローバルな難しい課題をどう社会的に共有していくか。上からの啓蒙ではなく下からの気づきが有効であり、実践的なところからコモン・フィロソフィーを見出していく新しい形の啓蒙が大事であるという議論をしていました。

大学が力を注ぐべきなのは、こうした学習の「場」をつくることです。それを学生のみなさんに主体的に活用してもらいたいと思っています。高みを目指す試行錯誤のなかで、ときには失敗することもあるでしょう。ウイルス感染を判定する方法として有名になったPCRを開発したキャリー・マリス博士の本を読むと、何度も実験を繰り返し、何度も失敗する姿が描かれています。前例がないからやってみよう。失敗してもよいからこそ、思いっきりチャレンジできる。東京大学はそうしたワクワクする場でありたいと願っています。

誰もがワクワク感を持ち、のびのびと活動できる場として、私たちは「世界の誰もが来なくなる大学」を作ろうと考えています。みなさんもうどういった学生生活を送りたいのか、ぜひ自分たちの目線からアイデアを出してください。また、東京大学が取り組む課題に

についても一緒に考えてみてください。みなさんにも、グローバルシティズンの一人として知っておくべき地球規模の課題を正しく理解し、その解決に向けて、共に考え、行動していただきたいと思います。

私は昨年春、1972年の国連人間環境会議から50年を機に開催された「ストックホルム+50」という国際会議に参加しました。その際、次の50年、つまり「ストックホルム+100」を考えたとき、いま学生であるみなさんの世代がむしろ、これからの議論

をリードすべきだとも感じました。東京大学も地球規模課題の一つであるGX（グリーン・トランスフォーメーション）を先導する高度人材の育成に力を入れるとともに、国連が後援する国際キャンペーンである「Race to Zero」に日本の国立大学として唯一参加しています。このキャンペーンは、2050年までに温室効果ガス排出量実質ゼロを達成するための行動を、世界に呼びかけるもので、昨年10月にはUTokyo Climate Actionという東京大学の行動計画をリリースしています。

りました。さらに昨年度は、全学の方針に基づき、原則として対面で授業を実施しました。

今年の3月13日からは、マスク着用に関し個人の主体的な選択を尊重することになりました。ゴールデンウィーク明けの5月8日には、新型コロナウイルス感染症は、現在の2類相当から、季節性インフルエンザなどと同じ5類に移行することが予定されています。本学では、文部科学省からの事務連絡などを踏まえ、引き続き基本的な感染対策を徹底した上で、4月1日以降、「マスクの着用は個人の判断を基本とする」ことになりました。ただし、「授業担当の教員が授業の形態、方法等によりマスクを着用する必要があるものと判断する場合や授業の運営に支障があると判断した場合は適切に対応する」こととなりますので、この点には留意してください。このように、この三年間の変化をみると、全面的なオンライン授業から次第に制限が緩和され、パンデミック前の状態に戻つつある中で、皆さんは今日の入学式を迎えたということになります。

教職員は、本来対面で授業や試験を行いたいところ、それが叶わないため、代替措置としてやむを得ずオンラインを導入したという背景がありましたが、学生に対するアンケートの結果によれば、学年が上がるにつれ、対面よりもオンライン授業を好む傾向も見られます。とりわけ数百人が出席するような大規模講義については、コミュニケーションツールを活用した議論の展開により、高い教育効果を得られるという声もあり、今後もオンラインを積極的に活用する場面もあろうかと思えます。また社会においても、オンラインを活用したリモートワークを取り入れる企業も

これを実施するにあたり、キャンパスでの学生のみなさんの活動によって、Net Zeroに向けてどのように前進していけばよいか、ぜひアイデアを出していただきたいと思えます。キャンパスにおけるGXを共に考え、さらに魅力ある東京大学と一緒に作っていきましょう。

ご入学まことにおめでとうございます。みなさんのこれからの活躍を期待しています。



教養学部長

真船文隆

多くあり、確実に私たちのライフスタイルが変わろうとしています。ただ、オンライン授業を強いられてきた皆さんが、制限のない日常生活を取り戻そうとしている今だからこそ、考えていただきたいことを2点お伝えします。

1つ目は、対面でのコミュニケーションを大事にしてほしいということです。コロナ禍で、3密を避けた結果として、必要なコミュニケーションも疎になってしまったのではないかと懸念しています。オンラインによる打ち合わせでは、情報の発信者には「伝えたいこと」と「伝えたいという動機」があって、打ち合わせを調整することが多いでしょう。従って、オンラインで伝えられる情報は確かに多いですし、情報伝達型の授業であれば、十分に成立すると思います。一方で、わざわざ打ち合わせを調整するほどでもないような些細なことは、伝えられずに放っておかれることとなります。皆さんのようなデジタルネイティブの世代は、SNSなどをうまく活用して頻繁に情報交換をし

教養学部長式辞

東京大学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。これまで皆さんを支えてくれたご家族、ご関係の皆様にも、教養学部の教職員を代表し心よりお祝いを申し上げます。

まず、大学における新型コロナウイルス感染症対策について触れておきましょう。皆さんは、パンデミックのために、自由な活動が制限された中で3年間を過ごしてきたことと思います。教養学部の授業は2020年の夏学期、私たちはこれをSセメスターと言いますが、全面的にオンラインに変更になり、定期試験もオンラインで行われました。2年生になると進学選択をすることになりますが、教養学部の履修科目の点数が、その主たる判断基準となりますので、前期課程教育に携わる教職員は常にその公平公正さを保たなければなりません。そのため、オンラインでの試験は、実施側と受験側の双方にとって、大きな出来事でした。当時の1年生は、せっかく入学したのに、キャンパスに来ることができない、授業に出席していてもクラスメートに会えないという現実に、大きな不満を抱いていたことは容易に想像できます。

翌年の2021年度には、新型コロナウイルス感染症に関する医学的な研究とともにワクチン開発が急速に進んだことを受けて、キャンパスライフを少しでも改善するべく、教養学部では、感染症の感染に対して十分な注意を払いつつ、語学や実験、身体運動の授業は対面とし、残りの授業は基本的にオンラインで行うという形態に変更しました。その結果、学生は週に2回程度大学に登校するようにな

ているかもしれませんが、SNS以上ミーティング以下の事柄は確実に存在します。このように決して大きくないけれども、挨拶だけでは済ませることのできないところがコミュニケーションの重要な部分を占めていると私は思っていますし、対面という状況は、確実にコミュニケーションのハードルを下げてくれるはずです。

2つ目ですが、コロナ禍では、「不要不急の外出を避ける」という制約がありました。それが緩和された今、意識して、自らの行動範囲を広げてほしいと思います。これは、私自身が教養学部に入學した当時から振り返り、過去への反省をもとに述べるものです。当時理科1類の学生だった私にとって、学びの場は、キャンパスのごく一部の場所でした。正門正面の時計台のある1号館で語学の授業を、5号館、7号館で数学や理科を、900番講堂で人文社会系の授業を受け、授業が終わったらすぐ家に帰るという具合です。おそらく、これはキャンパス全体の20%程度の面積にすぎません。その当時の建物はかなり老朽化していましたが、30数年の間にキャンパスは見違えるほど整備されました。キャンパスの東側には舞台芸術や音楽実習のための演習室、課外活動のための施設を備えたコミュニケーションプラザや駒場図書館が建築されました。その駒場図書館は、2022年10月に20周年を迎え、さらにその東側に図書館を増築する計画が現在進行中です。また、旧生協の跡地には、21KOMCEEという教室棟が建築されました。これは、従来の情報伝達型の授業からアクティブラーニング型の授業への転換を目指し、その当時の小宮山総長の「理想の教育棟」を建てるという方針に沿ったもので、Komaba center for educational excellence からKOMCEEと名づけられたものです。皆さ

んの中には、1年のSセメスターの初年次ゼミナールをこの教室で受講する人もいますでしょう。KOMCEEのコンセプトは、「滞在型の空間」です。つまり、授業が終わった後に、すぐに帰宅するのではなく、授業の内容を振り返るなり、友人と議論するなりができる空間を目指したものです。まずはキャンパス全体を見て回り、教養学部のもつリソースを十分に活用してほしいと思います。

教養学部のあるキャンパスを駒場Iキャンパスと言います。ここには、教養学部・総合文化研究科と数理学部研究科があります。さらに西側に歩いて5分ほどのところに駒場IIキャンパスがあり、ここには生産技術研究所と先端科学技術研究センターがあります。これらの研究科・研究所・センターでは世界トップレベルの研究が行われており、1年生でも受講できるゼミ形式などの授業も開講されています。さらにこの駒場地区は渋谷駅からすぐの場所にあり、渋谷駅のそばにあるスクランブルスクエアの15階の渋谷QWSでは、東京大学を含む6つの大学の連携プログラムがあり、皆さんのアクティビティを後押しする仕組みがあります。このように、大学はいろいろな形で外の社会と結びついています。学びは、駒場Iキャンパスの中の一部の教室の中だけではありません。教室やキャンパスの物理的な壁を飛び越えて、様々な経験してほしいと思います。

国立社会保障・人口問題研究所は、2050年には日本の女性の平均寿命は90歳を超えると推定しており、人生100年時代に突入します。今、社会は急速にGX（グリーントランスフォーメーション）に向かっていきます。気候変動に関する国際的な枠組み「パリ協定」は、平均気温上昇を産業革命以前に比

べて1.5℃に抑えるという努力目標を掲げていますが、目標達成には、2050年前後までに、カーボンニュートラル、つまり、温室効果ガスの排出量から吸収量と除去量を差し引いた合計をゼロにすることが必要です。そのためには、エネルギーリソースを大規模に転換し、エネルギー起源の二酸化炭素を中心として、メタンや一酸化二窒素の排出を削減し、更に、大気中に既に存在する二酸化炭素を直接回収し貯留するためには大きな技術革新が求められます。

一方で、太陽から降り注ぐ紫外線の多くを吸収しているオゾン層に穴が開く、オゾンホールにより地表に紫外線が降り注ぎ皮膚がんなどのリスクが懸念されていますが、国連等の関係機関が作成した報告書によると、南極上空のオゾンホールは2066年までには1980年の値にまで回復するという明るいニュースもあります。フロンガスは極めて安定な物質であるために、冷蔵庫やエアコンの冷媒などとして使われていました。しかし、後にノーベル化学賞を受賞したクルツェン、モリーナやローランドが、フロンガスがオゾン層を分解する可能性を指摘したのをきっかけに、1987年にモントリオール議定書によって46か国がこれらの物質の段階的な削減を決めました。このように、私たちの生活が地球に及ぼす影響を科学の力で理解し、技術的に対応することで解決に向かうことができるということも事実です。

皆さんは、今後このような節目となる2050年に向けて、中心となって活躍していく世代だと思います。そのためにも、教養学部前期課程での皆さんの学びが、そして課外活動を含めたキャンパス生活が、実り豊かであることを祈念して、教養学部長としての式辞といたします。

祝辞

新入生の皆さん、そしてご家族、ご親族の皆さま、おめでとうございます。

私自身も東大の卒業生ですので、入学時の受験戦争からの解放感、新しい学生生活を始めるわくわく感、今もよく覚えています。

長い受験勉強が終わって、ついに自由。た

くさん遊んで、恋人作って、ガンガンやっていると嬉しいです。

同時に、大学の4年間は、「自分で切り拓く、自分の人生」のスタート地点です。そしてこれからの皆さんの人生の中で、一番自由に、自分の器を広げ、自分の夢を探して突き進む時期でもあります。

私は東大卒業後、発展途上国を日本の立場から支援する国際協力機構JICA、民間の経営コンサルティング会社のマッキンゼーの日本オフィスと南アフリカオフィス、世界銀行、それからビル・ゲイツがマイクロソフトを辞めて、途上国の保健医療の問題を解決するために作ったゲイツ財団で、世界の貧困や感染症に立ち向かう仕事をやってきました。最近

では、WHOの独立パネルに参加して、新型コロナウイルスのような感染症の壊滅的な大流行を二度と起こさないための国際システムの改革を提案して、去年の3月からは、世界の感染症対策をリードするグローバルファンドという国際機関で、途上国の保健医療システムを強化して、感染症のパンデミックを起こさないように備える部局の長をやっています。

今日は皆さんに祝辞をお伝えできるということで、はるばるスイスからやってきました。この機会に、私が皆さんより少し人生を先に生きてきて、とても大事だと感じていること、大学に入るときに知っておきたかったと思うことを、二つのお話を通して共有します。

一つは「夢」について。もう一つは「経験」についてです。

まずは、夢について。

私は、東大に一浪して入りました。学力が特別あったわけでもありません。特に最初は英語が全然ダメで、英会話の授業では、体育会の友人と二人で、一番後ろの席で下を向いて、先生に当てられないようにやり過ごしていました。ただ東大に入るときにははっきり決めていたのは、大学の4年間で、人生をかけて取り組むことを決めたい、ということでした。何も考えずに野球だけをしていた中学、高校時代の生活への反省もあったと思います。

興味が湧いた授業をすべて試してみる中で、文化人類学の授業でパプアニューギニアの先住民のギサロという儀礼を見たんですね。そこで、すさまじい衝撃を受けました。めちゃくちゃ格好いいと。こんなに我々と全く違う世界観の社会に住む人々がいるのかと。そういう異文化に飛び込んでそこから学ぶ、文化人類学者になりたい、と思うようになりました。それからすべての学校の休みを使って、途上国を一人で旅しまわりました。グアテマラの山奥の少数民族の村にアボナシで行って、ホームステイさせてもらいながら、フィールドワークもやりました。

でもそこで見たのは、子どもが病気になっても医者も薬もない状況、毎日の重労働と日焼け、栄養不足でおばあさんのような顔をしている若いお母さん、地域に根深く残る差別から仕事の機会がなくて、くすぶっている同年代の若者など、美しい洗練された文化の裏にある、多くの理不尽でした。自分は、学者

としてそこから学ぶだけで終わりにたくない。人々が自分たちの文化に誇りを持ちながら、理不尽と戦って、日本なら簡単に治せる、あるいはかかることもない病気に命や可能性を奪われずに人生を生きられる、そのサポートをしたいと思うようになりました。大学時代に抱いたこの夢は、その後のキャリアの中で徐々に形になって、今も続いています。

「夢」について皆さんにお伝えしたいことは二つです。一つは、夢に関わる、心震える仕事をして欲しいということ。修行のために取敢て途上国の支援とは関係のない仕事をしたときに実感したのですが、自分の夢に関わる本当に好きなことをやらないと、それを徹底的に突き詰めることはできません。また、好きなことをやってないと、幸せの尺度が「自分が他人にどう評価されているか」になってしまう。それではうまくいかないときに持たないです。他人の評価を気にする他人の人生ではなく、自分がやりたいことに突き進む自分の人生を生きてください。

もう一つお伝えしたいのは、夢は、探し続けて行動し続ける人にしか見つけることはできないということです。夢が見つけられないというのは、ほとんどすべての人が抱え続ける悩みですが、夢は、待っていれば突然降ってくるものではありません。探し続けて、行動してみると、その中で少しずつ「彫刻」のように形作っていくものだと思います。周りに流されず、自分の興味のままに、探し続けてください。そしてそれが一番自由にできるのは、今からの4年間で。

二つ目のお話は、「経験」についてです。

貧困や感染症、気候変動のような世界の問題に立ち向かう仕事は、問題がいつも無茶苦茶に複雑なので、「自分のやっていることが、本当に問題の解決に役立っているのか」という疑問と常に向き合うこととなります。その中で私が「世界は変えられるんだ」と希望を持っていたのは、西アフリカのエボラ出血熱緊急対策の仕事でした。

エボラ出血熱という病気はご存じかもしれませんが、2014年にギニア、リベリア、シエラレオネの西アフリカの3か国で大流行し、先進国にも飛び火して、世界を震撼させました。私は37歳の時に、世界銀行で、この大流行を止めるための、緊急対策チームのリー



グローバルファンド 保健システム及びパンデミック対策部長

馬淵俊介さん

ダーを任せられました。

エボラの恐ろしいところは、感染者の約半分以上が死に至るということです。それは、自分や家族が感染すると、高い確率で、家族の誰か、あるいは全員が死ぬということです。私に対策チームを作った2014年の8月の時点で、感染者数、死者数は指数関数的に跳ね上がっていました。あとでリベリアのエレン・ジョンソン・サーリフ大統領が「私たちは全員死ぬと思った」と話されたほどの、危機的な状況でした。

緊急対策に当たって二つの難題に直面しました。一つ目は、時間です。感染症対策はスピードが命ですが、感染が爆発した3か国にはお金がなくて、大きな海外援助も遅れていました。世界銀行の資金が頼みの綱だったのですが、通常のプロセスでは、200億円近い大きな資金を効果的な形で届けるには、1年半かかります。そんなに待てるはずがない。そこで、経営コンサルティング会社、マッキンゼーで身に着けたオペレーション改革のノウハウを総動員して、プロセスを無くす、減らす、後回しにする、数倍の速さで回す、そして今何で遅れているかを全て目で見えるようにして、45日ですべてを完了させました。

もう一つの、より大きな難題は、死者の埋葬による感染の拡大でした。

エボラは人が亡くなったときに感染力が一番高く、お葬式で死者に触れてお別れをするのがその地域の非常に大切な儀式だったので、それを通じて感染が爆発しました。

この問題への医学的に効果的な対策は、死者に消毒液を掛けて、ビニールバッグに入れ

て、そのまま火葬することなのですが、このやり方は現地の人たちの大切な価値観に反するもので、全く受け入れられませんでした。その結果、死者の報告をしない、死体を隠すということが広がり、感染がさらに拡大しました。

この医学的な解と社会的な解との折り合いをつけるために、文化人類学者と現地の宗教リーダー、コミュニティリーダー、それから感染症対策の専門家と共同で、これなら感染のリスクを無くしたうえで、人々が尊厳ある死を迎えられるという、「安全な尊厳ある埋葬」というやり方を開発しました。それを宗教リーダー、コミュニティリーダーから、この方法でよいのだ、この方法で我々の尊厳と安全を守るのだというメッセージを発信してもらいました。

これが普及したことによって、埋葬による感染が防がれ、爆発していた感染が一気に落ちて行きました。2年後に、3か国すべてでエボラ感染を無くすことができ、死者も最悪のシナリオでは70万人を超えていつ終わるかかわらないという予想だったのを、1万人強にとどめることができました。

この話でお伝えしたかったことは、皆さんはこれからいろいろな学問や仕事で身に着けた力、「経験」を組合わせて、そのすべてで問題解決に挑むということです。私のエボラ対策の例では、文化人類学の考え方、感染症対策の専門性、民間の経営コンサルティングのスピード感と問題解決力の三つを組合わせて持っていたことが、大きな助けになりました。民間と公共の壁や、医療と文化、社会の壁などを「越境」した経験を持って、問題解決をまとめる力は、問題がどんどん複雑になるこれからの世界では、本当に重要になります。

一つ分野で世界のナンバーワンになることは、とても難しい。ですが、いくつかの重要な分野の経験やスキルを、自分だけにユニークな組合せとして持っていて、それらを掛

け算して問題解決に使えるのは自分だけという「オンリーワン」には、なることができます。

そこでとても大切なことは、「環境が人を作る」ということです。人間は弱くも強くもあり、自分のいる環境をたった一人で突き抜けて大きく成長していくことはとても難しいですが、逆に凄い人たちの中で、あるいは修羅場に身を置いて、難しい挑戦を続けていると、それが普通にできるようになって、その次のさらに大きな機会に手が届くようになります。環境は、「わらしべ長者」のように力をつけて、「経験を組合わせ」ながら得ていくものです。私の場合はそうやって徐々にできることを増やして行って、今に至っています。

最後に、人生のリスクについてお話しします。

私はついぶん前のセミナーで、大手商社に内定しているという大学生から、「馬淵さんは、どうしてそんなにリスクをとれるんですか。」という質問をされました。ここで言う「リスク」ってなんでしょうか。

Dropboxというウェブサービスの創業者が、MITの卒業式のスピーチで、こんなことを言っていました。人生は日にちに換算すると、3万日しかない。私はすでに、1万7千日を使っています。皆さんは、大体すでに7千日近く使っています。そして次の1万日は、もの凄く速く過ぎていきます。

時間がすごく限られている中で、考えるべきリスクは、何かに失敗するリスクではなくて、難しい挑戦に踏み込まないことで、成長できず、なりたい自分になれないリスク、世界に対してしたい貢献ができないリスク、行動を起こさずに「現状に留まることのリスク」だと思います。

これから皆さんが生きる世界は、これまでと比べて圧倒的に不確実で不安定で、危険が多く、逆にとてつもない可能性にも満ちた世界です。人類がこの先も長く生きられるかど

うかは、次の数世代にかかっているとも言われています。

人類が未来に希望を持って生きていくためには、世界の最高の頭脳が、気候変動や世界の不平等、感染症との戦いなど、世界の最大の問題に立ち向かっていかなければいけません。日本の最高の頭脳である皆さんにも、世界の、そして日本の最大の問題に立ち向かって行って欲しいです。

パナソニックを創業した経営の神様、松下幸之助の「道」という、私の座右の詩があるのですが、そこで彼はこんなことを言っています。一部を引用します。

“自分には自分に与えられた道がある。

どんな道かは知らないが、ほかの人には歩めない。

自分だけしか歩めない、二度と歩めぬかけがいのないこの道。

他人の道に心をうばわれ、思案にくれて立ちすくんでいても、道はずこしもひらけない。

道をひらくためには、まず歩まねばならぬ。

心を定め、懸命に歩まねばならぬ。

それがたとえ遠い道のように思えても、休まず歩む姿からは必ず新たな道がひらけてくる。深い喜びも生まれてくる。 ”

皆さんの東大での4年間で、皆さんだけのかけがえない道を、悩みながら心を定めて懸命に歩む、その一番最初の充実した時間になることを、心からお祈りしています。

改めまして、おめでとうございます。どうもありがとうございました。

(“ ” は、『道をひらく』(松下幸之助著、PHP研究所、1968年)より引用)

校友会会長祝辞

只今、ご紹介頂きました宗岡でございます。東京大学校友会を代表致しまして、東京大学に入学された皆様方に、心からお祝いを申し上げますたいと存じます。また、入学生のご家族

の皆様方にも、重ねてお祝いを申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

まずもって、3年にも及んだコロナ禍が収束に向かいつつある中で、このように入学式を盛大に執り行うことができましたことは大変喜ばしく、藤井総長はじめ学内の関係者の

皆様方のご尽力に心からの感謝を申し上げますたいと存じます。

新入生の皆さんは、この春の東京大学入学と同時に、全員が東京大学校友会の新たな仲間になられました。校友会会長として、新会員の皆さんを心から歓迎致します。

まず、簡単に私の自己紹介をさせて頂きたいと思います。私は、およそ半世紀前の1970年に農学部農業経済学科を卒業し、鉄鋼メーカーである当時の新日本製鐵に一期生として入社致しました。社長・会長を経て、現在、日本製鐵 相談役を務めておりまして、2020年からは大学の全学同窓組織であります東京大学校友会の会長も務めております。

ここで皆さんに東京大学校友会について少し紹介させて頂きます。本日皆さんにお配りしていますリーフレットにも記載のとおり、東京大学校友会は、団体会員と個人会員及び家族会員からなる全学同窓組織であります。団体会員は、学部・学科・部局、運動部・サークルなどの同窓会、国内外の各地における地域同窓会等々、300を超える団体からなり、そして、個人会員は、すべての在学学生、卒業生・修了生と教職員、合わせておよそ25万人で構成されております。また、昨年、家族会員を新設し、在学学生の保護者の方々も、東大校友会のグローバル・コミュニティに加わることができることとなりました。

東大校友会の具体的な活動と致しましては、卒業生向けのイベントのみならず、近年は、入学同期の学部生と卒業生との交流イベントや、就職活動を控えた在学学生と卒業生との座談会等、在学学生を支援する活動も拡充してきております。こうした東大校友会の世代や国籍を問わないコミュニティで、是非とも、皆さんの在学中、さらには卒業後も長きにわたり、東京大学の仲間との交友を広げて頂きたいと思っております。

さて、これから皆さんは、比較的自由に学

びの時間をつくることのできる、教養学部の前期課程に進まれるわけですが、この時期に、リベラル・アーツ、とりわけ教養としての歴史を学んでいただきたい。そして、多くの良書にも親しんで頂き、多様な知に触れられる、教養学部前期課程特有の良さを満喫して頂きたいと思っております。

何千年にも亘る人類の歴史において、我々は多くのことを学んで参りました。先人たちが幾多の問題にどう取り組み、成功したのか、或いは失敗したのか、各々の時代の思想や英知の結集を歴史は私たちに教えてくれています。多くの人々が、戦争の時代は20世紀で終わったと信じていましたが、ロシアによるウクライナ侵攻という野蛮な行為を見て、皮肉にも「歴史は繰り返す」と言わざるを得ません。そして、歴史を深く学べば学ぶほど、人間の本质がどのようなものであるか、また、リーダーに求められる真の資質は何であるかを私たちに教えてくれています。

今から、およそ2500年前の中国古代の思想家・孔子の言葉に、「君子は義に喩り、小人は利に喩る」という言葉があります。「立派な人間は、まずそれが正しいことがどうかを考へるが、つまらない人間は、まず利益になるかどうかを考へる」という意味であります。皆さんには目先の利益に左右されることなく、まずは何事も自らの良心に問う姿勢を持ち続けるリーダーになって頂きたいと思っております。

皆さんは、将来、この国のみならず、国際的なリーダーとなるが大いに期待される方々であります。これからの4年間、色々な



東京大学校友会会長

宗岡正二 さん

事柄を学び、学内外を問わず多くの人と交流の輪をつなぎ、視野を広げて頂きたい。また、2023年入学同期生同士の温かい仲間意識も大いに育てて頂きたい。東大校友会も、皆さんが素晴らしい東大生、東大卒業生としての人生を送られるよう、お手伝いして参りたいと考えております。

最後になりますが、皆さんの東京大学への入学を心からお祝い申し上げます。皆さんが本日、東京大学に入学できたのも、皆さんの努力だけで掴んだものではありません。これまで導いて頂いた恩師の先生方、そして、これまで皆さんを育み、支えてくれたご両親・ご家族に感謝するとともに、入学できた幸運にも心から感謝する、そうした謙虚な気持ちを忘れないでもらいたい。そして、皆さんが心豊かな人間に成長して頂くことを心から祈念致しております。改めまして本日は誠にありがとうございます。

入学生総代宣誓



理科二類

川上大和 さん

麗らかな春の日差しに心長閑な今日の佳き日に、令和5年度の入学生として、栄えある東京大学の一員になれますことを、入学生一同心より嬉しく思います。

本日はこのような盛大な式を、私たち新入生のために挙げていただき、誠にありがとうございます。またこの場をお借りして、これまで私たちを支えてくださった家族をはじめとするすべての方々に、改めて感謝申し上げます。

さて、現代社会において私たちは戦争や貧困、環境問題など様々な困難に直面しています。これらに加え、世代・人種・経済・性別間での分断が拡大し続けているこの時代を我々は生きなければなら

せん。東京大学の偉大な先輩であり、柔道の開祖でもある戦前の教育者、嘉納治五郎は、自身の理念として、「精力善用、自他共栄」という言葉を唱道しました。精力善用とは、自分の力を社会のために最大限に活用する、という意味で、自他共栄とは、融和協調の姿勢を以って、自他共に幸福を得る、という意味です。1世紀前に生まれたこの言葉は現代においても色褪せることなく、むしろ難題山積の現代社会で一段と輝きを増すように思われます。

この東京大学で学ぶ機会に恵まれた私たちは、これから学問の世界へ足を踏み入れ、広く深い教養を身につけるとともに、同じ志をもつ仲間との出会いの中で、偏見にとらわれない柔軟な思考を育み

ます。東京大学という素晴らしい環境を積極的に活用し、「精力善用・自他共栄」の精神で仲間と切磋琢磨し、将来社会で指導的役割を担えるよう研鑽に励む所存です。

最後に、「自他共栄」には、今の自分があるのは周りの人々の支えがあるおかげだという意味もあります。この先、藤井総長をはじめとする教職員の皆様方や先輩方の温かいご支援のもと、勉学の枠を超えた様々な活動に傾注できることに感謝の念を忘れず、東京大学で学び取ったことを将来自信を持って次世代へと還元できるよう、謙虚に日々邁進していくことをここに誓い、新入生の挨拶とさせていただきます。



令和5年度大学院入学式総長式辞

東京大学大学院に入学および進学されたみなさん、本日はまことにめでとうございます。ご家族や関係者のみなさまもさぞお喜びのことと思います。本学の教職員を代表して、心からお祝いを申し上げます。

さて、2015年の国連総会で持続可能な開発目標（SDGs）が採択され、2030アジェンダとよばれる2030年に向けての行動計画が示されました。今年、その中間点の8年目であり、9月にはグローバルレポート（GSDR）が発表される予定ですので、変革の加速に焦点があてられることになりそうです。

そのなかで「人類と自然の共存」が一つの重要課題となっています。私たち人間は、18世紀に産業革命を果たして以降、地球環境に大きな負荷をかけ続けてきました。地球温暖化や自然生態系の劣化が進み、人間自身を含めた地球上の生物に対して著しい負の影響を与えようとしています。一見、自然に優しく見える農業も、地球環境にもたらす負荷は深刻です。たとえば森林その他が農地に転換されると、さまざまな生物の生息地が失われ、生態系が劣化します。また、持続を考えない農業システムによってもたらされる環境汚染や土壌の劣化、淡水の過剰利用は、生物多様性に深刻な影響を与えています。その一方で、現在でも食糧生産は世界の人口に足りておらず、7億人近くが毎日の空腹に耐えている現実があります。さらにグローバルな農業生産のあり方もまた、経済的・ジェンダー的な不平等を内に抱えています。

東京大学は「世界の公共性に奉仕する大学」として、「人類と自然の共存」に貢献する決意を東京大学憲章で宣言し、2021年に公表したUTokyo Compassにおいても、「人類社会が直面する地球規模の課題に関し、本学が有するあらゆる分野の英知を結集してその解決に取り組む」という目標を掲げています。

その一環として、地球システムを人類の共有財産としてよりよく管理する仕組みの構築を目指す「グローバル・コモンズ・スチュワードシップ・イニシアティブ」に取り組んでいます。

しかし、地球環境問題の解決は容易ではありません。大学内の諸分野の英知の結集だけでなく、大学と社会との間での対話と協創が不可欠です。東京大学自らが対話を生みだして人々や組織をつなぎ、さまざまなステークホルダーとともに社会を変革していかなければなりません。

本日は、そのヒントをいくつかお話ししたいと思います。

東京・代々木に明治神宮内苑の森がありますが、これが、人によってつくられた森であることは、ご存知の方も少なくないでしょう。

1912年に明治天皇が崩御し、その翌年、渋沢栄一らの有志による請願活動のもと、明治天皇を祀る神社の建立を目指した調査会が創立されます。

現在、総面積72ヘクタールの大部分に常緑広葉樹からなる森が広がっていますが、いまから100年ほど前は雑草の生い茂る荒地でした。そんな場所に人工的に原生林のような荘厳な森をつくりだすため、当時の先端の学知と技術をもつ専門家が尽力します。この明治神宮の森の設計には、当時、本学の林学科の教授であった本多静六、講師の本郷高德、大学院生の上原敬二の3名が深く関わりました。

ドイツで森林学を学んだ本多静六は、自ら日本全国のさまざまな森林を調査し『日本森林植物帯論』をまとめますが、この多様な森の観察が設計思想にも活かされています。秩序正しく厳かな森を東京につくるには、どうしたらよいか。従来の神社林で目立つ大きな針葉樹ばかりではなく、地域在来の樹種であるシイ・カシなどの常緑広葉樹を中心とすることで、落ちた種子から次世代の樹木が

育って、森を維持できると考えました。本郷と上原の二人は、それを実現するための森林形態の設計を行います。しかし、成長した常緑広葉樹を大量に移植して森をつくるのは、予算的にも技術的にも困難でした。そこで、移植技術が確立していたマツの成木で森の基礎をつくり、その下に成長速度の速いヒノキやサワラを植え、さらにその下にシイ・カシ・クスなどの幼木を植え、時間をかけてこれらを成長させるという植物の生態に適した複合的な計画をたてます。マツやヒノキなどの針葉樹は、森の上部に枝葉が茂るので、一般に下部が暗くなって次世代の樹木を育てられませんが、シイ・カシ・クスなどの常緑広葉樹は比較的暗い環境に耐えることができます。本郷らが事業開始からわずか6年のうちに完成させた針葉樹の森は、100年以上が経った現在、自然のメカニズムのもとで設計通りに天然更新可能な常緑広葉樹の森へと遷移を続けています。

この事業が始まった当初、大学院生であった上原敬二は、設計だけでなく、造成事業の現場監督としても関わります。それは、上原が造成事業を「学術的な疑問解決に役立てる千載一遇の好機」ととらえていたからでした。江戸時代からの造園技術を庭師から吸収するとともに、造成現場においてさまざまな実験を行います。

100年をこえる時間スケールで、その理想を実現すべく、学知に基づくデザインから明治神宮内苑の森が生みだされたことは、人間の営為と努力による自然創造の可能性を示唆するものです。そして、地球環境の回復という困難で大きな課題に立ち向かう私たちに勇気を与えてくれます。若き大学院生であった上原敬二がこのプロジェクトに主体的に取り組み、自らの学術研究と実践の場として活用し、広く造園を学ぶ場を生みだしたことは、大学と社会との相互発展的な関係の先例であ

るともいえるでしょう。

もう一つ別の森の話をしましょう。時代は現代へ、場所は海をこえてパラグアイに移ります。パラグアイ東部からブラジルの南部に広がるマタ・アトランティカと呼ばれる森林は、世界からも懸念される深刻な危機に瀕していました。20世紀に始まった大豆の栽培や肉牛の飼育の大規模化のために、森林の90%以上が伐採されてしまったからです。輸出志向のプランテーション農業モデルによる大規模な森林伐採は土地の劣化を引き起こし、大豆栽培の拡大が土地需要を高めたことで、小規模農家の多くが居住地から去っていきました。

こうしたなかで、一つのNGOが、破壊を食い止め、景観を再生し、貧困を緩和する森林再生活動を開始します。このNGOはコナムリ(Conamuri)という女性農民と先住民による社会運動組織で、生態系に配慮した農業で農民の生活を守り、かつ女性のおかれた状況を改善することができる、新しい実践を提案しました。

コナムリの活動では、この地域で古代から飲用されてきた茶の原料であるマテの木を森林の中で栽培する、いわゆる森林農業(アグロフォレストリー)が大きな役割を果たしました。農業の代わりに自然のプロセスを活用した害虫管理など、生態系に学んだ農業が行われ、これまでに25万本のマテの木と9万本の原生樹が植樹されました。マテ栽培が農民の社会経済的地位を改善するとともに、森林の保護と再生につながっています。

マテ茶が、さまざまなステークホルダーの関与と協力を生み出したことも、注目すべき点だと思います。たとえば、グアヤキ(Guayaki)社という企業は、有機認証とフェアトレード・システムのもとで米国においてマテ茶製品の販売を行っています。社名のグアヤキは森林の先住民の部族名に由来し、この部族からマテ茶を買い付け、社名の使用料を支払うことで、製品販売が先住民の生活向上に寄与するという、持続的発展の一例にもなっています。さらに、毎年、栽培区画の在来種のセンサスを契約農家に要請することで、森林生態系のモニタリングと保全にも貢献しています。

また、栽培地域に水源を依存するイタイプ(Itaipú)ダムの電力会社も、マテ茶農家と密接に協力し、栽培拡大に必要な種子を集め、

その保全に貢献しています。これは、大豆農地への転換がダムに流入する土砂量を増加させたことへの反省であり、マテ茶栽培によって森林が維持されれば、電力会社にも恩恵があるとの判断にもとづくものです。

注目しておきたいことは、女性たちによって伝統的に実践されてきた農業のなかに、自然資源を継続的に利用する持続可能なシステムをつくりあげる、大きなヒントがあったということです。

ここで話を「森」から「海」に移し、私も関わった日本工学アカデミーからの提言「海洋テロワール」についてご紹介したいと思います。

「テロワール」とは、フランスのワイン生産に源を発する言葉で、ブドウ畑を取り巻く自然・人間環境の固有性を指します。地域の気候や土壌、地形などの自然環境、また生産者がかつ文化や社会を統合してとらえ、その固有の価値を評価する考え方です。「海洋テロワール」は、その海洋版です。地域の海がかつ特徴を活かして豊かな恵みを生み出すことを目指すと同時に、自然から収奪するのではなく、海に循環型の生産システムを構築することにより、恵みを持続的に利用しようとするものです。

その基盤として、まずは海を知ること、そのためにも地域の海に関するデータの収集と共有が必要となります。しかし、海は広大で、必要な解像度で観測することは容易ではありません。このため、研究者のみならず、さまざまな人たちに観測の担い手になってもらおうと考え、OMNI(Ocean Monitoring Network Initiative)というプロジェクトを立ち上げました。これは、海のデータをみんなで集めて活用しようという完全オープンソース型のプロジェクトで、どこでも入手できる部品で作られた観測装置を用いて誰もが思い思いに観測を行い、得られたデータをみんなで共有して利用します。

「海洋テロワール」の実現には、このように海洋観測を民主化し、誰もが参加できるようにすることが大切です。集められた事実を共有することで「その海」や「その浜辺」を昔から利用してきた人々を含めて、海の持続可能な利用法について地域あるいは社会全体で議論することが可能となります。そうした場をつくり、市民や地域とともに海だけでは

なく、社会を変えていく取り組みも、これからの大学の重要な役割の一つです。

森や海などの自然環境は社会全体の共有資産であり、これらを適切に管理・運営することは、私たちの社会を持続的・安定的に維持することと深くつながっています。

本学の経済学部教授であった宇沢弘文先生は、1970年代にこうした特質をもつ資産を「社会的共通資本」と呼び、その適切な管理と運営の重要性を説きました。「資源」としての勝手で一方的な利用ではなく、自然環境を「資本」としてとらえ、その社会的な再生産の望ましいあり方を考えるという姿勢です。この考え方は、現在の自然関連財務情報開示TNFD、すなわち、組織の経済活動が自然環境に与えるリスクや機会を明らかにする取り組みにもつながります。気候関連財務情報開示TCFDでは気候変動が対象ですが、TNFDでは対象が自然資本全体に広がっています。さらに、リスクだけでなくプラスの効果、いわゆるネイチャー・ポジティブの実現も目標となっています。

「社会的共通資本」は、森や海などの自然環境だけでなく、道路や交通機関などの社会的インフラ、教育や医療などの制度資本をも包摂しています。そして、大学もまた重要な社会的共通資本の一つです。

先に述べたように、UTokyo Compassでは、地球規模課題の解決に取り組み、世界の公共性に奉仕するという理念を、知をきわめ、人をはぐくみ、場をつくることを通じて実現していく方針が掲げられています。私は、森や海が私たちの社会を豊かにしているように、大学が社会を豊かで幸せなものにしていかなければならないと考えています。そのとき、これから大学院で学ぼうとしているみなさんこそが、社会を豊かで幸せなものにしていく重要な主体であり、その駆動力たりうるのだと思います。

東京大学は、高度な専門性をもつさまざまな研究グループの集合体で、その多様性は総合知として大きな力になるものと期待されています。冒頭で触れたSDGsには、持続可能な開発のための17の目標と169のターゲットが掲げられていますが、本学であれば、これらすべてについてそれぞれ研究グループを見つけることができるでしょう。一方で、東

京大学は大きな組織であり、かつ、その先端研究の高い専門性ゆえに縦割りになりやすい面ももちあわせています。であればこそ、個人的にも組織的にも、対話が大切になります。

現在、私たちはグリーントランスフォーメーション（GX）の実現において活躍できる人材の輩出を目指して、SPRING GX という分野横断的な人材育成プログラムを設けています。全学の博士課程学生の600名が参加していますが、みなさんには、専門知の探求の場としても、また他分野や社会とのネットワークを築くための場としても活用してもらいたいと思っています。そして東京大学の多様性が、未来を創出していく大きな力となることを実際に経験していただきたいと思っています。

学生のみなさんの力も、大学の大きな財産です。東京大学におけるGXのための学生による自発的な活動として、四つの環境系学生団体のメンバーを中心に設立されたUTokyo Sustainable Network(UTSN)があります。UTSNは、キャンパス内へのウォー

ターサーバの設置、カフェテリアへの植物性食品の導入を進めるとともに、国連が後援するRace To Zeroキャンペーンに向けた東京大学の行動計画策定にも協力しています。この行動計画は2050年までに温室効果ガス排出量実質ゼロを達成しようとするもので、2022年10月にUTokyo Climate Actionとして発表しました。

UTSNはまた、Nature Positiveな大学を目指す世界的なネットワークであるNature Positive Universitiesにも学生アンバサダーとして参加しています。これは、Nature Positiveのためのオープンサイエンスの場や市民科学のハブとして大学を利用するだけでなく、そのキャンパスを都市の緑化空間として生物多様性向上のために活用し、同時にNature Positiveにも貢献しようとする試みです。昨年12月、UTSNの4名の学生が、カナダで開かれたConvention on Biological Diversity COP15でNature Positiveに向けた取り組みについてプレゼンテーションを行いました。みなさんにも、こうした活動を含

めてさまざまな側面から、「人類と自然との共存」という課題にどう取り組んでいくか考えていただければと思います。

明治神宮の森は、環境と都市を調和させる資本のデザインとして、武蔵野の自然と景観を残しつつも、人間が通る道によって大都市のさまざまな生活といまつながり、さらなる遷移を続けています。世代をつないで環境と都市の調和を実現した明治神宮の森は、たとえば、大学のキャンパスを生物多様性向上のために利用する場合にも大きな示唆を与えてくれるでしょう。すなわち、私たちが、東京大学のキャンパスをNature Positiveな「森」としてデザインするとき、あるいは、私たちの社会を自然資本が尊重される、いわば「森」としてデザインするとき、現在の姿だけでなく、現実には見られない100年先の姿や役割に思いを馳せる必要があります。みなさんには、そうした想像力を豊かにして、これからの学びと研究に取り組んでいただきたいと思っています。

大学院入学、まことにおめでとうございます。

研究科長式辞

東京大学大学院にご入学、誠におめでとうございます。こうして皆さんの新たな門出に立ちあい、ご家族や関係者の方々とも一緒に喜びを分かちあえることをとてもうれしく思います。

さて、私は立場上、大学生や高校生から進路に関する相談を受け、「なぜ、先生は大学院に進学したのですか」と問われることがしばしばあります。そういうとき私は答えに窮してしまいます。というのも、私はそれほど明確な目標や希望があって大学院に進学したわけではないからです。もちろん、専門学部に進学する際に選択した教育学は面白い学問だと思っていました。また、私は教育学部の教育行政学コースに進学しましたので、教育政策や制度の在り方を学んで、現実の教育をよりよくすることに何かしら貢献できればとも漠然と考えていました。しかし、正直に言うと、何を置いても大学院に進学したいという強い意志があったわけではなく、他の選択肢よりは自分に合っていそうだという消極的

理由による大学院進学でした。

私が1988年に大学を卒業した当時、日本はバブル景気の真っただ中で教育学部でも金融業界や製造業に就職する友人が少なくありませんでした。私も、周囲の雰囲気の流れのように外資系金融企業の面接を受けたりしましたが、会社で働いている将来の自分というものに何となく実感が持てず、就職活動を途中で放棄してしまいました。就職活動を中止することを決めた暑い夏の日の夕方、大学院に行って勉強を続けてみようかと漫然と思いつきながら新宿のビル街を眺めてたことを今も思い出します。そんないい加減なことよく大学院入試に合格できたものと呆れられそうですが、その年度に私が進学したコースの入学者は私一人だったので、先生方も入学者ゼロになるくらいならと大幅に譲歩してくれたのでしょうか。

結果的に、私の大学院への進学は間違いではなかったと思います。修士論文で保護者や地域住民による学校運営参加を進めていた、



教育学研究科長

勝野正章

当時のイギリスの教育政策を消費者主権と市民的公共性の視点から読み解くことを試みたあと、某財団から奨学金をいただいて1年間イギリスに留学する機会を得ました。帰国して博士課程に復学してからは、教育に説明責任や結果責任が強く求められるという世界的な教育改革の趨勢のなかで、学校や教員の評価の在り方に関心を持つようになり、そうしたテーマで何篇かの論文を執筆しました。そうこうするうちに、大学教員の職を得ること

ができ、2004年には教員として東京大学に戻ってきました。

このようにお話すると、大学院に入学してからは迷うことなく、順調に研究者、大学教授の道を歩んできたと思われるかもしれませんが、必ずしもそうではありません。投稿論文が不採択になって戻ってきた時は非常に落ち込みましたし、このまま研究を続けても一人前の研究者になれるのかと不安で夜眠れないこともありました。皆さんも、これから大学院で研究を進めるなかで、研究がうまく進まず、自信が持てなくなったりすることがきっとあると思います。そんな時、私は、自分と異なる環境で仕事や生活をしている高校や大学の友人と会って、愚痴を聞いてもらい、気持ちの上で助けられることがしばしばありました。逆に会社勤めの苦労話を聞き、好きな研究に専念させてもらっている自分は恵まれていると思ったり、自分もくよくよせず元気を出そうと励まされたりしました。

友人と言えば、教養学部と同じクラスで人文社会系大学院に進学した横田理博君とは、不思議なことに、気持ちが落ち込んでいる時に限って、法文2号館地下の銀杏メトロ食堂でばったり一緒になりました。横田君は後に『ウェーバーの倫理思想：比較宗教学に込められた倫理観』という研究書を著し、現在は九州大学で倫理学の教授をしています。博士課程終盤の頃、私はマックス・ウェーバーを読みかじり、ある論文で彼の「価値中立論」に言及しようとしていたのですが、横田君に昼食を食べながら話を聞いてもらい、「その解釈で間違っていないよ」と肯定してもらえたことが自信になりました。

もうひとつ、教養学部のクラスつながりです。本日も、入学式に列席されている人文社会系研究科長の納富信留先生は、私の一学年上で同じドイツ語クラス、いわゆる「上クラ」でいらっしゃいました。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、東京大学の学部入学生は「上クラ」の先輩に大学生活

全般についての手ほどきを受け、たいへんお世話になり、しばらく交流が続きます。当時、私は特に納富先生と親しくさせていただいたわけではありませんが、既にギリシャ語もマスターしていらっしゃるのか、「上クラス」でも俊英として一目置かれる存在であることはよく存じ上げていました。その後、文学部哲学科、人文社会系研究科へと進学された先生と本郷キャンパスですれ違うことくらいはあったろうと思いますが、直接の接点はありませんでした。それが昨年、国際卓越大学院プログラム（WINGS）の担当者としてご相談させていただく機会があり、その際に私が約40年前の「下クラ」であったことも告白しました。しかし実を言うと私は、それよりだいぶ前に、ケンブリッジ大学に留学されていた納富先生がプラトン研究で世界的に注目される成果を収めたことを紹介した新聞記事を通じて、一方的な「再会」を果たしていたのです。それ以来、今なおお元にすら及びませんが、私にとって納富先生は研究者として少しでも近づきたい目標です。

長々とした自分語りになりましたことをどうかご容赦ください。明確な目標や計画を持って入学式に臨んでいる皆さんには、私の話はまったく無意味でしょう。ただもし、「なぜ、あなたは大学院に入学するのですか」との問いに確固たる答えを持っていない人がいるとしたら、私の経験談を聞いて少しだけ安心してもらえたかもしれません。また、目標ははっきりしているけれども、自分の能力に自信が持てないという人がいるかもしれません。これから研究を進めるうちに、周りの優秀な人たちと比較して自分は劣っていると思えることもあるかもしれません。このなかには、まもなく国内外で注目される研究成果をあげ、新進気鋭の研究者として頭角を現す人が必ずいます。また、大学院で学んだことを活かして社会の各方面でリーダーシップを発揮する人もいます。つい、そうした優秀な人

たちと自分を比べてしまいがちですが、周りとの比較は研究の動機づけになることもありますが、常に生産的とは限りません。どうかあまり深く思い悩まないで欲しいと思います。決して謙遜ではなく、私には特に優れた研究実績があるわけでもなく、東京大学の錚々たる研究者に囲まれて劣等感のようなものを感じることもあります。それでも、根本のところでは楽観的であったことが、そこそこの研究成果をあげてこられた理由なのではないかと思っています。

私の場合、自信を失い、不安な時は、研究とは直接関係のない仕事をしている友人や異なる専門分野の研究者に励まされ、支えられる経験をたくさんしてきました。皆さんにも、大学外や専門外といった「よその世界」との交流を大切にすることをお勧めします。もちろん、心配事や不安がある時は、所属する研究室や専攻の教員や仲間に遠慮せずヘルプを求めてください。また、周囲には相談できないときのために、大学は第三者的な立場で相談に乗ってくれる窓口などの体制を設けていますから、どうぞ利用してください。悩みや不安は研究上のことに限りません。既にご存知かもしれませんが、東京大学は藤井総長のもとで策定されたUTokyo Compassに「誰もが安心して学び、働き、活動できる場」であることを掲げ、2022年6月には「東京大学ダイバーシティ&インクルージョン宣言」を公表しています。この宣言は、ぜひともご一読いただければと思います。

東京大学大学院では、全ての分野で、国内外の大学や研究機関をはじめ、市民社会、産業界、政府・行政機関と連携して、日々、新たな知が創造され、その知を個人の幸福とともに、よりよい社会の実現に向けて役立てる活動が行われています。この公共的な価値ある仕事の仲間となる皆さんの入学を心から歓迎し、私からの挨拶に代えさせていただきます。



祝辞

Let me begin by saying what a pleasure it is to be here with you today.

Thank you. Thank you.

I want to thank the President of the University Mr. Teruo FUJII -san.

It is because of him that I am here today. Thank you for inviting me. I was humbled when you asked; I am even more humbled now as I stand before the school.

Thanks to all who made my visit possible. And to Naoko Ishii-san, executive vice president and a long-time dear friend.

Let me also thank all the faculty, family and loved ones here today.

The University of Tokyo was founded on this day in 1877 as the first imperial university. That is an important piece of history and a huge responsibility. It should fill you with pride to be in these walls where some of the greatest of Japanese academic, scientific, social and cultural life have walked.

I too went to one such old university, the University of Michigan founded in 1817, and each time I go back, or see a memory, I feel a sense of pride and belonging to a history and tradition of excellence.

You have all taken different and sometimes very challenging journeys to get here. But for many, today is the realization of a dream and the beginning of a new one.

Excellence is what you are here to achieve, to nurture and to harvest.

In our turbulent times, academic excellence is not enough; we need to be able to navigate the changing tensions of the world outside as we define ours, embrace new concepts, use old histories to solve new problems and be people of conviction.

Today we have shifting global geopolitical tensions; we are going back to a time when belligerence is more prevalent than peace. Where conflict seems to be the way to resolve differences and not dialogue.

Over two years of dealing with COVID and having to fight for basic human necessities, such as access to food, to health and social interaction, has changed the world as we know it. There is maybe a greater sense of collective and individual vulnerability. The result is more auto-determination and less collaboration; rather than globalization, we are talking of friend shoring and near shoring.

I believe it is to a large extent the exposure of our vulnerabilities and truths that is driving us back to a society of anxiety and self-preservation and fear of the other.

Second, we are also living in a society where our collective actions have undermined the global planet as we knew it. The arctic is melting, the polar bears are threatened, and the Sahara Desert is expanding. People and ecosystems on which we all depend are under threat. Foreshadowing dire consequences for people and planet.

To address this, we must adopt the opposite stance from individual self-preservation and work as a global community to protect our collective asset. We are called to work together to protect our global commons.

This is the fundamental contradiction of our time.

We have never needed each other more, but we have never worked so hard to accentuate our differences.

Third, we still all strive to live in peaceful, inclusive and prosperous societies. But the COVID-19 pandemic and the ensuing



流動性および持続可能性ファシリティー議長、国際連合気候変動ファイナンスハイレベル・パネル共同議長 及び ブルッキングス研究所シニアフェロー

Vera Songwe さん

war in Ukraine have led to three years of economic contraction in many parts of the world. Lately this has been compounded by inflationary pressures. As we all know inflation is the fastest creator of poverty and economic stagnation. Dealing with these challenges will require your concerted effort.

To restore growth, we will need research and innovation from battery technology, to pharmaceuticals, to data privacy management and artificial intelligence. Innovation and productivity of course coupled with the appropriate business environment will deliver growth.

Your class has to ask the ethical questions around innovation from nuclear technology for cheaper better more accessible energy to AI and its impacts on our societies. Society will look to you for help to answer these questions and I hope you can each debate them with your colleagues, use the spaces made available here at the university to debate them in multidisciplinary ways. All of humanity needs answers and I am sure with your own unique but collective perspectives you can help offer solutions.

Japan is a member of the G7 and the world is looking to you to be part of the solution to the global challenges. For many developing

world economies, it means redressing some of the inequities from old systems of the past. From issues of global multilateralism to issues of gender equity.

In many of our societies, women are still not fully represented and or given the recognition they deserve. That is why I feel personally indebted to the President to have asked me to come here to speak. As women and particularly as women in academia it is still a tough road. I was surprised at the Oscars this year to find out it was the first time an Asian woman won an Oscar. We must value women not least because we are 50 percent of our productive economies but because we now have abundant research which shows that results are better in business, in organizations, in universities when women are included in decision making.

Whatever you study, that should be your ambition that your drive for excellence will produce ripples in oceans and shores far, far, afield.

Your journey as academics begins today, as leaders tomorrow look to leave the world more hopeful and more united than we see it today.

The beauty of your time is there are no certainties. It is a time for upsets, for persistence and hard work. Who would have guessed that under Shohei Ohtani's leadership Japan would beat the US at the baseball world cup?

The beauty with academic excellence is that it teaches you rigor; a rigor that you can use in life after the university. It disciplines you.

You know when I first went to university I enrolled into film. I wanted to be a film director.

There were many advantages to being a film student in the day – one of them being that most of our classes were later in the day!

My dad after my first transcript did not think that was a profession which was right for me. So I switched to economics and political science. To be a good economist I had to do more math. I did. It was not as much fun as film class I can tell you that. In the beginning it was hard and lonely. But as I applied it to economics, I was excited and got really energized.

The persistence and preparation has served me well.

Today, unlike in the past, many of you will change careers many times, and so what you learn here more than anything else will be ability to apply critical thinking to various situations and to understand how you can use logic, science and knowledge to make decisions in the field you master. You must master something fully if you can. That will always set you apart and keep you learning.

Dear students, you are about to write an important part of your history and I hope for you it is an unforgettable experience where you take in every moment; have no regrets and build a strong network of friends and support systems who once out of here can help you change the world.

Reach out and support those behind you as well. It is a relay game and we must continue the chain.

Thank you very much for listening. I wish you an excellent start of the year and an outstanding and successful journey during your time at UTokyo.

Thank you once again to Mr. President for inviting me and for your unapparelled hospitality.

入学生総代宣誓



法学政治学研究所

李遠杰 さん

本日はこのような素晴らしい入学式を挙行していただき、心より感謝申し上げます。これから、卓越した環境で志を同じくする仲間とともに研究に精進できることに大変喜びを感じています。

さて、大学院入学生の代表として宣誓に際し、「未知への勇気」についてお話しさせていただきたいと思います。

大学院と学部の違いは、「学習」と「研究」の区別にあると言われてます。学部段階の学習は、先輩が築き上げた既存の知識を吸収、整理、適用することが主ですが、大学院段階の研究は、その整理、適用に止まらず、既存の知識を土台に新たな知見を生み出すことが望まれるように思います。そうだとすれば、大学院に入学する私たちは、これから前人未踏の未知の領域に踏み込んでいくことを覚悟

しなければなりません。

未知の領域には不確実性がつきもので、自分の研究に真の価値があるのか、成果が得られるのかなどを予測すること困難です。もちろん、その不確実性は、資料収集や、先生と研究同士からの助言で軽減できますが、将来必ず成果を収める保証はどこにもありません。結局、どの道を選び、どこへたどり着くのかは、最終的には私たち自身の判断に委ねられます。

こうした未知の領域への挑戦には、まず決断の勇気が必要であるように思います。努力が報われないことを杞憂し研究が停滞しないように、適切に準備した上で賭けに出なければならぬこともあるでしょう。そして、賭けである以上失敗は避けられませんが、その際に、試行錯誤の勇気を持ち続けることが大切です。研究を進める中で、トライ・アンド・エ

ラーを繰り返しながら、何とか切り抜けていくしかありません。さらに、いくら試行錯誤しても、問題は完全に解決されないことが多いかもしれません。その時、最善でなくても次善の結果を受け入れる勇気も求められます。研究は代々続く共同のプロセスであり、私たちは過去の先輩と未来の後継者の橋となり、たとえ小さな貢献であっても重要な役割を果たすことができます。

よって、私は本学新生を代表し宣誓します。

決断の勇気、試行錯誤の勇気、そして次善を受け入れる勇気を胸に、未知へ踏み出し、学を志すものとしての矜持を常に忘れず、真摯に学問に取り組むことをここに誓います。最後に、私自身が剛毅果敢の精神で自らの研鑽を絶やさぬことを改めて誓い、宣誓の言葉の結びといたします。

撮影：尾関祐治



海と希望の学校 — 震災復興の先へ —

第25回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所・大槌沿岸センターを舞台に、社会科学研究所とタッグを組んで行う地域連携プロジェクト——海をベースにしたローカルアイデンティティの再構築を通じ、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み——です。研究機関であると同時に地域社会の一員としての役割を果たすべく、活動を展開しています。

もう5年、まだ5年



大気海洋研究所附属
国際・地域連携研究センター長 青山 潤

三陸沿岸に設置された「すずめの戸締まり」の白い扉。震災を忘れないというメッセージは地元の人たちの心を強くしてくれます

東日本大震災から12年。未曾有の災害に見舞われた被災地三陸の復興を旗印に始まった「海と希望の学校 in 三陸」も6年目を迎えました。この間、大気海洋研究所と社会科学研究所という異色のタッグにより、「海をベースにしたローカルアイデンティティの再構築」を通じて、三陸沿岸にいくつもの希望の種を生み出すことができたと自負しています。海に関わる様々な企画の中で、老若男女を問わず、震災直後にはなかった笑顔に触れることが多くなりました。海洋研究者の話聞いて水産関係の大学へ進学した高校生、江戸時代の三陸沿岸で起きた“三閉伊一揆”に関する政治学者の解説に感銘を受け、唐傘連判状に署名して学級目標に“一揆”を掲げた中学生、そして研究者との関わりを通じ、成果ではなく“答えを探すこと”の重要性に気づいた生徒たち。大学の壁の中から地域へ踏み出した我々のメッセージを受け止めてくれた若者たちが、三陸の将来に大きな希望の花を咲かせてくれると信じています。思い返せば5年前、どこかそっけなかった地元の自治体や各種団体の皆さんに、「東大さん、本気だったんですね」と言われるようになったことが何よりの勲章です。

「海と希望の学校 in 三陸」を通じ、私



自身も多くを学びました。それまで行ってきた海洋科学研究には、時代も国境も文化も超えて存在する絶対解があり、そこへ続く道に残る先人たちの足跡や、更なる高みを目指す世界中の研究者たちの動向を示す論文という明確な地図がありました。かつては、自分の現在地や進む方向を確認できるという安心感を意識することすらありませんでした。しかし、「海と希望の学校 in 三陸」には、道標どころか明確なゴールすらありません。いったいどこを目指して、何をすればよいのか。訳もわからず手探りで進む心細さといったら……。何もかも投げ出して、研究の

世界へ駆け戻りたくなかったものです。

そんな私の灯台となったのは、震災前から「希望」という掴みどころのないテーマに挑み続けてきた社会科学研究所の研究者たちの考え方や立ち振る舞いでした。今、振り返れば、自分はなんと小さなことに怯えていたのかと感じます。海洋研究の地図に、希望のありかを示すことができれば、これまでにない新しい世界を創造できるかもしれません。

「海と希望の学校 in 三陸」は、5年の区切りを迎えました。震災復興支援を長く見つめてきた三陸の人たちは、「金の切れ目が縁の切れ目」となりがちであることをよく知っています。「東大さん、やっぱり本気だったんですね」。そう言ってもらったためにも「海と希望の学校 in 三陸」はこれからも継続します。地域との連携で一番大切なことは、大仰な理念や奇抜なアプローチではなく、そこを信じたゴールを目指し、いつまでも本気で走り続けることだと知ったからです。一方、このプロジェクトには、震災復興だけでなく、その先に広がる世界にも希望を生み出すポテンシャルがあると確信しています。機会があれば、いつかどこかで「海と希望の学校」の力を試してみたいと考えています。



山田湾にびっしりと浮かんだ牡蠣の養殖筏



「海と希望の学校 in 三陸」公式 Twitter (@umitokibo)

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）



デジタル万華鏡 第34回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

工学系研究科建築学専攻
技術専門職員

角田真弓

関東大震災と大学建築

東大本郷構内構想図（昭和11年頃、岸田日出刀画）
内田祥三によるキャンパス構想に基づき描かれた油彩画

本郷キャンパスや駒場キャンパスを歩いていると、赤茶色や黄土色のスクラッチタイルに覆われた古い建築がキャンパス空間を形成していることがわかります。これらの建築は、第14代総長を務めた内田祥三（1885～1972）を中心とする大学営繕課（現在の施設部）の設計に係る、関東大震災後に建てられた鉄筋コンクリート造のいわゆる復興建築です。

ちょうど100年前にあたる1923（大正12）年9月に発生した関東大震災により、東京はもとより南関東を中心に多くの建物が倒壊や焼失しました。大学の建築も例に漏れず、大半を占めたレンガ造校舎は大きな被害を受け、教育再開に向け校舎建築の再建が喫緊の課題となります。

内田祥三は東京帝国大学卒業後、建築学科教授を務める傍ら営繕課長を兼任しており、関東大震災により被災した東京帝国大学のキャンパス復興に尽力しました。当時の営繕課には岸田日出刀など数多くの建築学科卒業生が採用され、20年弱の間に40棟以上のキャンパス建築が建設されました。内田ゴシックと呼ばれる特徴的なスクラッチタイル貼のカレッジ・ゴシック建築ばかりに目が行きがちですが、瓦屋根が葺かれた育徳堂（1935年）や七徳堂（1938年）、モダニズム建築の特質を持つ小石川植物園本館（1939年）など用途や立地に合わせたデザインを採用していることが解ります。

内田祥三に関する資料は東京大学文書館や東京都公文書館などが所蔵していますが、内田家に保管されていた図面類が2000年にご遺族より工学系研究科建築学専攻に寄贈されました。工学系研究科建築学専攻ではこの資料群を東京大学デジタルアーカイブズ構築事業によりデジタル化し、2022年9月から「内田祥三資料」としてインターネット公開しています。

キャンパス散策とともに100年の歴史を感じてください。

<http://www.history.arch.t.u-tokyo.ac.jp/db/uchida/>

蔵出し！
文書館The University
of Tokyo
Archives

第43回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

刑務所は意外と身近？

みなさんは、刑務所の作業で作られた製品を買ったことはありますか。最近では、洗濯用スティック石鹸は買い占め問題が起こるほど、とくに人気ようです。

今回ご紹介する資料は、大正13年の、小菅刑務所からの刑務作業品の用命依頼の文書です。（「刑務者作業製作ニ係ル諸種製品供給ニ應ス可クニ付御用命方照會越ノ件」『官庁往復 大正十三年』（S0003/40））。大学では依頼を受けて、各部署が直接申し込むようにと学内周知しています。

まさかの刑務作業品の販促文書に驚きましたが、こうした作業物品販売や業務引き請けは、実は、明治5年に「監獄則並図式」が定められた時から、すでに制度化されているものでした。

ところで、東京大学には刑務作業品が間違いなくひとつ残されています。安田講堂の基礎に使われている小菅刑務所製の煉瓦です。平成25・26年に行われた改修工事の際に、桜花の刻印のある通称「小菅煉瓦」が確認されています（東京大学大講堂（安田講堂）改修工事報告書）。小菅刑務所は、もともと高品質の煉瓦をつくる工場があった場所を引き継いで設置されたもので、小菅煉瓦は軍施設や官公庁に多く使われたそうです。それならば安田講堂で採用するのも当然のように思われますが、じつは明治末期にはすでに煉瓦製造事業は大幅に縮小されており、関東大震災でついに操業中止となりました。そうした状況下でなお小菅煉瓦が選ばれた理由は筆者には確認できていませんが、いずれにせよ、安田講堂の小菅煉瓦は最晩期の貴重なものと言えそうです。

学内には、まだ他にも刑務作業品が残されているかもしれません。そこの古い帳簿も、もしかして……（小菅煉瓦について成瀬晃司先生（埋蔵文化財調査室）に多くの御教示をいただきました）。

（准教授・森本祥子）

<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/>

ワタシのおシゴト 第203回

RELAY COLUMN

教育・学生支援部
国際教育推進課学生交流チーム

柴崎亜弥

USTEP生いらっしゃい!



米国でのNAFSA*年次大会へ出展

国際教育推進課（グローバル教育センター設置に伴い国際交流課から進化しました！）では、学生の国際教育交流に関する幅広い業務を行っています。その中で「ワタシのおシゴト」は、世界中にある80校以上のパートナー校から交換留学生（USTEP生と呼びます）の受け入れをコーディネートすることで、海外パートナー校の担当者・本学へ留学を希望する学生・部局の担当者様など、様々な方と日々コミュニケーションをとっています。

留学は人生に大きな影響を与える貴重な経験だと思うので、留学生が本学で有意義な時間を過ごせるように心がけて仕事に取り組んでいます。感染症や世界情勢の影響を大きく受ける分野のため、臨機応変な対応が求められる難しさや責任を感じる場面も多いですが、来日した学生の嬉しそうな笑顔が見られる瞬間はとてもちがいを感じます。



心強いチームの皆さんと！

得意ワザ：何ごとにも楽しく、まずはやってみること！

自分の性格：山よりは海派です

次回執筆のご指名：橋本有菜さん

次回執筆との関係：同期で留学生受入仲間

次回執筆の紹介：おっとり系でも実は行動派

ぶらり
構内ショップの旅

第14回

Bio cafe ape @駒川キャンパス の巻

体と環境に優しいイタリアン

駒場リサーチキャンパスのAn棟1Fにあるオーガニックカフェ「Bio cafe ape」。隣接するイタリアンレストラン「ape cucina naturale」で腕を振るう島田伸幸シェフの料理を、より気軽に食べられるカフェとして2016年にオープンしました。イタリア語でミツバチを意味する店名の「ape」には、花から花へ花粉を運ぶ蜂のように、生産者とお客さんをつなげたいという思いが込められているそうです。野菜や調味料など、使用している食材は全てオーガニック。草木堆肥による土作りを行っている自然



島田伸幸シェフ

農園の野菜やハーブで育てられた豚など、厳選した素材を生かし、健康に配慮した食事を提供しています。

ランチは2種類から選べるパスタとサラダボックスのセットが1000円（学内者は900円）。水曜日はピザも選択できます。サラダボックスは、栄養価を高くするために発芽させたレンズ豆と春菊などのサラダや、パプリカのフランボワーズマリネなど時期によって変わる総菜が4種類（単品600円）。ドレッシングにも人参やキュウリなど、旬の野菜が使われています。全てのメニューは、健康を考えて優しい味わいにしていると話すマネージャーの矢木清美さん。「咀嚼して食べていただく、素材が本来持つ味を楽しめます」

毎週金曜日に登場するカレーは、スパイスを調合して作る本格派。ターメリックやパプリカを使ったご飯と一緒にサーブされます。

食材から洗剤まで、サステイナブルなものを使用しているape。食事を入れる容器も土に還る植物由来の材料で作られたもの。混雑時でなければ、持参した容器に詰めてもらうこともできるそうです。コーヒーやハーブティーを飲むだけでも、気軽に利用してほしいそうです。



オーガニック野菜をたっぷり使ったパスタとサラダのランチセット

営業時間 ● 10:30-14:30 定休日：土、日、月

https://www.instagram.com/biocalfe_ape/

インタープリターズ・第188回 バイブル

総合文化研究科教授
科学技術インタープリター養成部門 **梶谷真司**

コミュニケーションの前にコミュニティを!

私は2013年から2015年の3年間、京都の総合地球環境学研究所（通称「地球研」）で、都市と地方の関係から環境問題を考えるプロジェクトをもって来た。これは国際規模では、先進国と発展途上国の関係であり、より一般的に言えば、「中心」と「周縁」の関係である。そこにある問題とは、「中心」に当たる都市や先進国が物事を決定し、「周縁」に当たる地方や途上国の人々を犠牲にしているということである。つまり、環境問題とは要するに格差問題なのである。そのような視点から、プロジェクトでは、周縁に位置するコミュニティのイニシアティブをどのように強化するかという課題を立てていた。

さて、環境問題に取り組むさい、通常は理系の研究者が中心になっていて、解決すべき問題——汚染や破壊——が具体的に決まっているのが普通だろう。ところが私たちは、コミュニティ形成の仕方からアプローチしていたので、取り組むべき問題が明確ではなく、理系の研究者がほぼいなかった。代わりに私たちのプロジェクトにはいろんな分野の人たちがいた。哲学以外に、文化人類学、民俗学、宗教学、人文地理学、建築史、社会安全学、都市政策、環境史、災害史、さらには農家の人や金融機関の人、自治体職員、デザイナーもいた。

それで私たちがしていたのは、ひたすらおしゃべりであった。メンバー間はもちろん、地方のいろんなところへ行っている人と話をした。結局私たちは、具体的成果はとくに出来なかったが、一つはっきり分かったことがある——科学に限らず、専門領域が何であれ、よいコミュニケーションをするには、それ以前によりコミュニティがなければいけないということだ。さもなければ、立場の違いからくる衝突や軋轢など、コミュニケーションの困難さにフォーカスが当たりやすい。だから問うべきは、このコミュニティがどんなもので、どうすれば実現できるかである。この一見当たり前のことが、意外に理解されていない。プロジェクトの最大の成果は、そこにあったと考えている。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpretor.c.u-tokyo.ac.jp>

ききんの **き**

寄付でつくる東大の未来

第42回

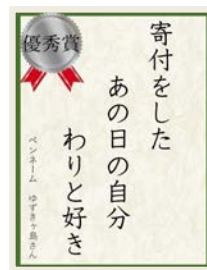
本部渉外課
戦略チーム

杉山光佑

川柳で届けたい、寄付への想い。

東大基金では、昨年秋に「寄付川柳コンテスト2022」を開催し、寄付をテーマとした川柳を募集しました。募集当初は、本当に作品のご応募をいただけるのか心配だったのですが、メールマガジンやSNSでの告知に加え、イベント会場に川柳応募BOXを設置するなど、地道に広報を続けたことで、最終的に寄付者、卒業生、教職員など様々な方々から計381作品のご応募をいただきました。

これらの作品の中から、基金事務局での選考を経て、大賞1作品、優秀賞6作品、特別賞3作品を選出しました。入賞作品は、学内向けにライブ放送でお届けした「基金つながるラジオ」で発表したほか、作品紹介動画を作成し東大基金のWebページに掲載しました。どんな作品が入賞したのか気になる方は下記のQRコードから作品一覧をご覧ください。また、紹介動画では、私が心を込めて入賞作品を読み上げたので、そちらにもご注目ください。



優秀賞受賞作の一つ

これら一連の企画により、東大基金は「寄付月間2022」の「企画特別賞 学校賞」を受賞しました。「寄付月間」とは、「欲しい未来へ、寄付を贈ろう。」を合言葉に毎年12月の1か月間、全国規模で行われる寄付啓発キャンペーンです。この期間に合わせて様々な企業や団体が寄付に関する取組を実施しており、今回は160個以上の賛同企画の中から特別賞に選出いただきました。

担当者の手作り感満載の企画ではありましたが、川柳というツールを通じて、多くの方に東大基金や寄付の魅力について、知っていただく機会になったのではないかと思います。また、あまりコストをかけなくても工夫次第で企画を盛り上げることができるという手ごたえも感じ、一職員としても学びが多い企画となりました。

私たちは今後も、東大基金の取組みや寄付についての情報発信を続けていきます。川柳コンテストのように、学内の皆様にもご参加いただける企画も実施していきますので、どうぞお楽しみに!

川柳コンテスト結果
<https://utf.u-tokyo.ac.jp/newslist/senryu2022result>



東京大学基金事務局（本部渉外課）
kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
3月14日	本部広報課	大江健三郎氏の訃報に接して (総長談話)
3月16日	本部渉外課	ご入学記念キャンペーン 2023
3月16日	医学系研究科・医学部	神経生理学分野 狩野方伸教授が日本学士院賞を受賞
3月16日	附属図書館	総合図書館貴重図書のゲーテ自署付書簡を公開
3月20日～4月11日	広報室	人類に残された猶予はあと10年しかないってホント?→渡部雅浩、フロンと違いCO ₂ 削減はなぜ進まない?→亀山康子、日本のペットボトルはちゃんとリサイクルできているの?→野田俊也、温暖化でサンゴが北上しているってホント?→安田仁奈 GX入門/身近な疑問 vs 東大 (『淡青』46号)
3月22日	経済学研究科・経済学部	【注意喚起】経済学研究科教員を装った迷惑メッセージにご注意ください
3月23日	本部 GX 推進課	東大生のSDGs認知度は過去最高の95.8%に TSCP学生委員会が第4回意識調査の結果を発表
3月23日	本部総務課	令和4年度東京大学学位記授与式を挙行
3月24日	本部総務課	令和4年度東京大学卒業式を挙行
3月27日	総合文化研究科・教養学部	オマーン・スルタン国の諸大学と、学術・教育分野での交流について協議
3月28日	本部社会連携推進課	2022年度フィールドスタディ型政策協働プログラム活動報告会を開催
3月28日	本部学生支援課	東京大学フューチャーファカルティプログラム第20期履修証授与式を開催
3月30日	リサーチ・アドミニストレーター推進室	東京大学URAネットワークシンポジウムを開催
3月31日	先端科学技術研究センター	リズ・トラス前英首相来日講演を実施
3月31日	本部経理課	東京大学初のCIOに元ブラックロック・ジャパン(株)の福島毅氏が就任
3月31日	本部協創課	第11回Beyond AIサイエンスカフェ 動画を公開
4月3日	工学系研究科・工学部	フィンランド・オウル大学との連携協定を締結
4月3日	本部広報課	令和5年 部局長交代のお知らせ
4月5日	工学系研究科・工学部	第4回 東京大学—清華大学 オンライン学生交流イベントを開催
4月5日	本部環境安全課	第7回東京大学環境安全衛生スローガン募集
4月6日	教育学研究科・教育学部	石川県と東京大学との幼児教育・保育に関する連携協定を締結
4月6日	本部社会連携推進課	UGIP(ソフトバンク(株)企画) データ・ハッカソン閉会式を実施
4月7日	教育学研究科・教育学部	国際学術交流会を開催(教育学研究科・ストックホルム大学との共催)
4月7日	生産技術研究所	英文広報誌「UTokyo-IIS Bulletin」Vol.11を公開
4月7日	生産技術研究所	アヌフリエフ特任准教授、杉原講師が文部科学大臣表彰 若手科学者賞を受賞
4月7日	広報室	ネットゼロへの道——COP27とこれから
4月11日	本部博物館事業課	IMT学生ボランティア募集



CLOSE UP 部局長交代のお知らせ

4月1日付で部局長の交代がありました。

	新部局長	前部局長
大学院医学系研究科・医学部	南學正臣	岡部繁男
大学院工学系研究科・工学部	加藤泰浩	染谷隆夫
大学院人文社会系研究科・文学部	納富信留	秋山 聰
大学院理学系研究科・理学部	大越慎一	星野真弘
大学院農学生命科学研究科・農学部	中嶋康博	堤 伸浩
大学院経済学研究科・経済学部	古澤泰治	星 岳雄
大学院総合文化研究科・教養学部	真船文隆	森山 工

	新部局長	前部局長
大学院教育学研究科・教育学部	勝野正章	小玉重夫
大学院新領域創成科学研究科	徳永朋祥	出口 敦
医科学研究所	中西 真	山梨裕司
地震研究所	古村孝志	佐竹健治
東洋文化研究所	中島隆博	高橋昭雄
物性研究所	廣井善二	森 初果
大気海洋研究所	兵藤 晋	河村知彦



CLOSE UP 総合図書館貴重図書のゲーテ自署付書簡を公開

(附属図書館)



ゲーテ自署付書簡 [Letter] Weimar, 29. Dcbr. 1822 [to L. W. Cramer] (WA IV-36, S. 249対応)

総合図書館では、東京大学デジタルアーカイブス構築事業により、貴重図書であるヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の自筆署名が入った書簡のデジタル化を行い、その画像と翻刻テキストを公開しました (<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/goethe/>)。この書簡は、ゲーテが1822年12月29日付で、ヴェツラー在住の法律家兼鉱物学者のクラマー (Ludwig Wilhelm Cramer) に宛てたオリジナル書簡一通です。ただし末尾の結語と自署以外は、ゲーテに仕

えたヨーン (Johann August Friedrich John) の筆跡と言われています。2003年に、書簡を所有していた和田昭治氏の意向により当館に寄贈されました。なおドイツでは長らく所在不明とされていたもので、総合文化研究科の石原あえか教授の丹念な調査により、この書簡の来歴等が確認されました (詳細は「日本に現存するゲーテ書簡 調査報告と再発見」<https://doi.org/10.15083/0002006008>を参照のこと)。公開画像はIIF、翻刻テキストはTEIに準拠しており、総合図書館所蔵であることを明示すれば自由に利用できます。



CLOSE UP TSCP 学生委員会が第4回意識調査の結果を発表

(本部GX推進課)



TSCPは2008年にスタートした東京大学サステナブルキャンパスプロジェクトです (ポスターのデザインは総合文化研究科修士2年のLeah Hanさん)

TSCP学生委員会は、「東大生のサステナビリティ意識調査2022」を実施し、3月に結果報告書を公表しました。学務システムUTASの掲示板やメールで周知がされ、本学に在籍する1000名の学生が2022年6~7月に回答しました。主な結果としては、東大生のSDGs認知度が過去最高の95.8%となり、就職活動でSDGsを考慮する東大生は66.0%を占めるなど、サステナビリティに関する意識が高まっていることがわかりました。一方で、本学が掲げるGX (グリーントランスフォーメー

ション) の認知度は25.2%、「学内消費電力量の可視化」といった個別的な取り組みの認知度は総じて4割を下回るなど、学内の取り組みの認知度や関心に課題が残ることもわかりました。2023年度TSCP学生委員会委員長の別木苑果さん (教養学部4年) は、「より多くの学生を巻き込み、東大のGXを加速することを目指したい」と、今期の抱負を語りました。その他、結果報告書ダイジェスト版はこちらから→<https://online.flippingbook.com/view/506839498/>



CLOSE UP URAネットワークシンポジウムを開催

(リサーチ・アドミニストレーター推進室)



工学系研究科修士2年・中島佑佳さんによるグラフィックレコーディングより

2月27日、東京大学URAネットワークシンポジウム「多彩なURAがつなぐネットワークによる研究力強化の未来」を開催しました。研究力強化に関連するURAの専門知をどう組織で活かせばよいか、異なる組織体制を持つ大学の事例に加え、社会科学の視点もいかがいながら議論を深めました。文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課長の橋爪淳様 が基調講演を行い、「多彩なURAがつなぐネ

ットワークによる研究力強化の未来」に関する総合討論では、URA推進室の古宇田光プリンシパルURAと京都大学学術研究展開センターの伊藤健雄様が事例を紹介し、社会科学研究所の石田賢准准教授が「社会ネットワーク論を通して考えるURAネットワークの意義」について講演しました。URA推進室長の齊藤延人理事・副学長と副室長の岸利治執行役・副学長が開閉会の挨拶を各々務めました。

●令和4年度学生表彰「東京大学総長賞」受賞者

【課外活動、社会活動等】

杉田南実 (教養学部4年) ◎	東大応援部初の女性主将としての活躍
Yanekara (松藤圭亮)	東京大学の起業家エコシステムが育てた、エネルギー問題に挑むディープテック・スタートアップとしての多方面にわたる実績
浦野健人 (情報理工学系研究科修士1年)	第44回世界オセロ選手権優勝

【学業】

菅田利佳 (教育学部4年) ◎	国際教育協力における音楽の重要性に関する研究、及び、共感と協力の輪を広げる発信活動
浅野良成 (法学政治学研究科博士課程 (令和4年3月修了)) ◎	安全保障問題に注目した現代日本の代表民主制の実態分析
青木真恒 (教養学部4年)	中国ムスリム社会におけるアラビア文字漢語文献とその表記法
山本章人 (情報理工学系研究科修士2年)	差分プライバシー理論を用いた大規模ゲノム統計解析および医療データマイニングのための効率的かつ高精度なプライバシー保護技術の開発
仲里佑利奈 (理学系研究科修士2年)	大規模数値シミュレーションを用いた宇宙初期の星団と銀河の研究
浅見仁太 (薬学系研究科博士3年)	胆汁酸トランスポーター NTCP による B 型肝炎ウイルス認識の構造基盤
谷口大輔 (理学系研究科博士3年)	赤色超巨星の探究と学際領域の開拓

学生表彰選考会議で慎重に審議を重ねた結果、総長大賞3件 (表内◎印)、総長賞10件 (大賞3件含む) が選出され、3月15日に安田講堂において授与式が行われました。皆さん、おめでとうございます。



餅は餅屋

かつて私は東京大学総合研究博物館に所属し、学術的な展覧会を計画する機会を幾度となく得ることができました。このようなイベントを成功させるため、私は常に最高の専門家に相談しました。共同研究の依頼と同様に、データベースを活用し、鍵となる論文を精査し、関連論文を熟読した上で、最適な専門家に連絡するのです、「先生は私をご存知ないですが、私は先生のことよく知ってるんです」。

相互のメリットが明瞭な共同研究と異なりますが、断られた経験はほとんどありません。卓越した研究者は多くの場合、「よいものを広めたい」という情熱に燃えているのでしょう。その情熱が原動力となって、知的好奇心を強烈に刺激する優れたコンテンツが生まれます。学術分野の進展に著しい貢献をした研究者は、誰よりも深くその分野の真髄を見抜けるので、その研究者による平易な解説こそが、最も貴重なコンテンツになるのです。

しかしコンテンツは優れていても、それが人々に伝わるかどうかは話が別です。ここには全く異なる要素が入るのです。私自身は理系の研究者ですが、文系の力や芸術的な感性が非常に重要であることを痛感し、より強く

リスペクトするようになりました。さらに、子供たちとのコミュニケーション能力やビジネススキル、イベントの雰囲気づくりの才能なども重要な要素です。餅は餅屋と言いますが、自分である程度できそうでも、専門的な能力を持つ一流の人材に頼る方が、遥かに良い結果が得られます。

内容は優れているのに、その良さが伝わらない——このような構造は、学内組織においても見受けられます。大学ランキングや海外でのビジビリティが良い例でしょうか。昨年、私は専攻長として、私たちの組織が抱える問題点について所属する全教職員と議論しました。とめどなく問題点が指摘される中で、洞察力の鋭い教員がひとことでもまとめてくれました。「本来は得意でない雑務に、必要以上に熱中してしまう教員の“凝り性”が問題だ」。

教員は研究と教育に集中すべきです。研究教育に関連が薄い業務は教員にはやらせず、外部組織の協力を創造的に取り入れる方が、効率が良さそうです。

宮本英昭
(工学系研究科)

